

〔共同研究〕

## 頼瑜撰『真俗雜記問答鈔』訳注（四）——卷第三ノ一——

### 『真俗雜記問答鈔』訳注研究会

はじめに

『真俗雜記問答鈔』は、新義真言教学の祖と称される中性院俊音房頼瑜僧正（一二二六—一三〇四）（以下、頼瑜）が、その時々書き留めた記事を集成した書物である。その条目は一三二〇余项にのぼり、書名の如く真言密教や仏教諸宗派に関わる事項はもとより、頼瑜自身の夢記や和歌、さらには公家の修法や諸家との手紙、和歌論や世典に関する記事など、その内容は多彩である。一人の真言僧侶による教理的著作の域を超え、中世に生きた頼瑜の人物像、さらには当時の宗教文化や社会状況までも窺い知ることができる貴重な資料と言える。

本書は古来より三〇巻・二四巻・一一巻など種々の説があり、また写本によって巻順の移動や内容の増減が著しい。本書はすでに『真言宗全書』第三七巻にて、「高野山南院松永有見師藏写本」を底本とし、二七巻本の体裁をもって翻刻化されている。しかし、底本・対校本二本ともに欠巻があり、編者自身の言葉で「後に多数の写本を用いて完璧を期すべき」とされるように、校訂テキストとして未だ不十分といえる。

そこで本研究会は諸写本を聚集し、そのなかで巻数の揃った最も古い写本である「智積院新文庫蔵本」

を底本に定め、順次校訂本文の作成と訳注研究を進めている。新文庫本は寛永一六年（一六三九）、深識を始めとする一五名により書写され、智積院第四世元寿（一五七五—一六四八）の蔵書となつて今日まで伝えられている。また新文庫本は、種智院大学本、惟圭範海本、東大寺図書館本、成田山仏教図書館本、大谷大学本、智山書庫本（慈忍本）、智山書庫本（海応本）、そして真言宗全書底本の松永有見師蔵本など、多くの写本の祖本に位置する重要な写本でもある。

新文庫本の書誌的事項や諸写本との関係については、高橋秀城「智積院蔵『真俗雜記問答鈔』について」（『智山学報』五四・二〇〇五年）、同「頼瑠撰『真俗雜記問答抄』諸本概略」（大正大学綜合佛教研究所『真俗雜記問答鈔』の翻刻・校訂研究会編『《頼瑠撰》『真俗雜記問答鈔』の研究』ノンブル社・二〇一二年）を参照されたい。

今回報告するのは、新文庫蔵本全二五冊のうち、整理番号・新文庫三一—四—（二五—二三）に相当する一冊の前半部分（一丁表—一〇丁表）である。本書は、外題に「真俗雜記」とあり、内題は無いが、種智院大学本、東大寺本など校勘に用いた古層に位置する写本に「第三」とあり、その他の写本と勘案して、本書を「巻第三」と定め、今回報告する箇所を仮に「巻第三ノ一」とした。

## 凡 例

一、本稿は、頼瑠撰『真俗雜記問答鈔』の【本文】に校訂を加え、条目ごとに【校勘】【訓読】【注釈】【解説】を施したものである。

二、【本文】は、智積院新文庫蔵本（寛永一六年（一六三九）写）を底本とし、次の諸本により校訂を施

した校訂本文である。諸本に付された返点と送り仮名をもとに、返点と句読点を補い、文意に応じて適宜改行した。

三、【校勘】には、本文に対する諸本の差異を示した。また本文の表記が底本に依らない場合は、その根拠を記した。校合に用いた諸本の略号と該当箇所は次の通り。なお諸本に記された補入符や傍注による本文補訂は、(底補)(種注)のように示した。

(底) 智積院新文庫蔵『真俗雜記』（新文庫三一—四—（二五—二三）・一丁表—一〇丁表）

(種) 種智院大学蔵『真俗雜記問答抄』元自老至五（三六丁表—四六丁裏）

(東) 東大寺図書館蔵『真俗雜記』一二三（二九丁表—三六丁裏）

(慈) 智積院智山書庫蔵『真俗雜記』一二三（慈忍本）（智山書庫二七—四六—二—（二二—一）・（七一丁表—八〇丁裏）

(海) 智積院智山書庫蔵『真俗雜記』（海応本）（智山書庫六—一四—（七—一）・八六丁表—八八丁表）

(長) 種智院大学密教資料研究所長谷文庫蔵『真俗雜記』第一第二第三（六五丁表—六九丁裏）（種智院大学密教資料研究所紀要）第九号・二〇〇七、(真)対校本①本と同本）

(真) 『真言宗全書』所収『真俗雜記問答鈔』第一五（高野山南院松永有見師蔵写本）（『真言宗全書』三七・三〇七頁上—三二三頁上）

また(真)に付記される次の校訂本の校異についても、底本と比較して差異を示した。

(ロ) ロ本（高野山正智院蔵写本）

四、【本文】の条目ごとに適宜に題名を付け、通番号を付した。巻第三ノ一に収録される条目は次の通り。

四九、釈論第四持四重担故名住地事

五〇、因不如故得起而有事

五一、於有愛數四住地事

五二、勝鬘經云世尊四住地力一切上煩惱依種事

五三、仏菩提智斷事

五、【本文】の校訂に際しては、いわゆる異体字の類もふくめて、原則として通行の字体に改めた。また略字なども本来の字体に改めた（例…マカビルサナ↓摩訶毘盧遮那、介↓金剛、圣↓経、并↓菩薩）。また踊り字も元の字体に改めた。なお中略を意味する〇は、そのまま示した。

六、【訓読】は、通読の便を考慮し、文意に応じて適宜改行し、段落を設けた。句読点を施し、漢字は原則として通行の字体を用い、送り仮名は歴史的仮名遣いとした。また校訂者による振り仮名も、歴史的仮名遣いで表記した。なお傍注は（〜）に、割注は「」に記した。また書名は原則として『』で囲った。

七、【注釈】における主要引用文献の略号は次の通り。

『大正新修大蔵経』↓大正、『卍統蔵経』↓卍統、『日本大蔵経』↓日蔵、『弘法大師全集』↓弘全  
八、主要参考文献は次の通り。

雲井昭善『《仏典講座一〇》勝鬘経』大蔵出版・一九七六年

桜部建『《仏典講座一八》俱舍論』大蔵出版・一九八一年

平川彰『《仏典講座二二》大乘起信論』大蔵出版・一九八六年

九、本稿の執筆担当者は次の通り。各担当箇所【解説】末尾の（〜）内に執筆者名を記した。

小宮俊海（研究会代表・大正大学綜合仏教研究所研究員）

増山賢俊（大正大学綜合仏教研究所研究員）

中村賢識（大正大学綜合仏教研究所研究員）

寺山賢照（大正大学綜合仏教研究所研究員）

なお、全体の編纂・校正を、小林崇仁（大正大学非常勤講師）、別所弘淳（大正大学綜合仏教研究所研究員）、小崎良行（大正大学綜合仏教研究所研究生）も執筆担当者と共同で行った。

## 訳注研究

### 四九、釈論第四持四重担故名住地事

#### 【本文】

釈論<sup>(1)</sup>第四持四重担故名<sup>(2)(3)</sup>住地<sup>(4)</sup>事

問<sup>(4)</sup>。勝鬘<sup>(5)</sup>經中、為<sup>(6)</sup>顯<sup>(7)</sup>下<sup>(8)</sup>授受正法含<sup>(9)</sup>多法<sup>(10)</sup>義<sup>(11)</sup>上<sup>(12)</sup>拳<sup>(13)</sup>四<sup>(14)</sup>譬<sup>(15)</sup>之中、第三<sup>(16)</sup>譬<sup>(17)</sup>說也。是則授受正法生<sup>(18)</sup>四<sup>(19)</sup>乘<sup>(20)</sup>、譬<sup>(21)</sup>地持<sup>(22)</sup>四<sup>(23)</sup>重<sup>(24)</sup>担<sup>(25)</sup>也。是能所持<sup>(26)</sup>同功德法門<sup>(27)</sup>譬<sup>(28)</sup>也。今何<sup>(29)</sup>。譬<sup>(30)</sup>五<sup>(31)</sup>住地<sup>(32)</sup>耶<sup>(33)</sup>。

答。論師人師依<sup>(34)</sup>憑<sup>(35)</sup>經論說<sup>(36)</sup>一事、隨<sup>(37)</sup>宜<sup>(38)</sup>轉換<sup>(39)</sup>說<sup>(40)</sup>之常事也。故彼天台止觀以<sup>(41)</sup>涅槃<sup>(42)</sup>經貝<sup>(43)</sup>螺<sup>(44)</sup>雪<sup>(45)</sup>鶴<sup>(46)</sup>譬<sup>(47)</sup>四<sup>(48)</sup>德<sup>(49)</sup>。隨<sup>(50)</sup>

義<sup>(51)</sup>轉用、譬<sup>(52)</sup>四<sup>(53)</sup>教<sup>(54)</sup>四<sup>(55)</sup>門<sup>(56)</sup>也。今又、隨<sup>(57)</sup>宜<sup>(58)</sup>轉用<sup>(59)</sup>也。仍無<sup>(60)</sup>過<sup>(61)</sup>。

勝鬘<sup>(62)</sup>經云、勝鬘<sup>(63)</sup>白<sup>(64)</sup>仏<sup>(65)</sup>曰、我當<sup>(66)</sup>承<sup>(67)</sup>三<sup>(68)</sup>仏<sup>(69)</sup>神<sup>(70)</sup>力<sup>(71)</sup>、更復<sup>(72)</sup>演說<sup>(73)</sup>。○<sup>(74)</sup>

授受<sup>(75)</sup>正法<sup>(76)</sup>大義者、則是無量<sup>(77)</sup>得<sup>(78)</sup>。一切<sup>(79)</sup>仏法<sup>(80)</sup>授<sup>(81)</sup>三<sup>(82)</sup>八<sup>(83)</sup>万<sup>(84)</sup>四<sup>(85)</sup>千<sup>(86)</sup>法門<sup>(87)</sup>。譬<sup>(88)</sup>如<sup>(89)</sup>下<sup>(90)</sup>劫<sup>(91)</sup>內<sup>(92)</sup>成<sup>(93)</sup>時、善興<sup>(94)</sup>大<sup>(95)</sup>雲<sup>(96)</sup>雨<sup>(97)</sup>衆<sup>(98)</sup>色<sup>(99)</sup>雨<sup>(100)</sup>及

種々寶。如是授受正法。雨無量福報、及無量善根之雨。又如劫初成時、雨大水聚、出生三千大千界藏、及四百億種々類州。如是授受正法、出生大乘無量界藏、一切菩薩神通之力。○。

又如大地持四重担。何等為四、一者大海、二者諸山、三者草木、四者衆生。如是授受正法、善男子善女人、建立大地。堪能荷負四種重任、踰彼大地。何等為四、謂離善知識、無聞非法。衆生以人天善根、而成就之。求聲聞者、授聲聞乘。求緣覺者、授緣覺乘。求大乘者、授以大乘。是名授受正法。○。

又如大地有四種寶藏。何等為四者、無価、二者上価、三者中価、四者下価。是名大地四種寶藏。如是授受正法。善男子善女人、建立大地。得衆生四種最上大宝。何等為四、授授受正法。善男子善女人、無聞非法。衆生以人天功德善根、而授与之。求聲聞者、授聲聞乘。求緣覺者、授緣覺乘。求大乘者、授以大乘。如是得大宝。衆生皆由授受正法。○。

授受正法、即是波羅蜜。

寶窟中末云、初門有四譬。曰含第一興雲注雨譬、第二大水出生世界譬、第三大地能持重担譬、第四大地有四寶藏譬。

又云、又如大地者、上明雲水出生。曰含藏即是用雲水。以成地、今明地亦有荷負之義。上明下授受正法、出生五乘上。今明下授受正法、以成出人。人亦有荷負義。故以地呪人。如地能持四重担。得正法、菩薩亦利益四種之人。大地即是能持。四重担即是所持也。有人言、大海最重、喻於凡夫、諸山次輕。喻於聲聞、草木轉輕。喻於緣覺、衆生最輕。喻於菩薩、今明不爾。大海最重、喻於菩薩、諸山雖重、猶輕於大海。喻於緣覺、草木輕於諸山。喻於聲聞、衆生復輕草木。喻於凡夫、所以作此譬者、物重譬於德重、物輕譬於德輕。

又云、問。摂受是能摂受之智。正法は六度之行。智<sup>(10)</sup>与行、既至<sup>(10)</sup>不二玄門。一智体即具<sup>(10)</sup>一切行<sup>(10)</sup>。答。如<sup>(10)</sup>一正観止惡義辺說、名為<sup>(10)</sup>戒。澄静<sup>(10)</sup>義辺、名為<sup>(10)</sup>之為<sup>(10)</sup>定。能照義辺、稱<sup>(10)</sup>之為<sup>(10)</sup>惠。達到義辺、即<sup>(10)</sup>彼波羅蜜。是故一智摂<sup>(10)</sup>一切行<sup>(10)</sup>文<sup>(10)</sup>。  
又疑云、勝鬘經云。四種住地生<sup>(10)</sup>一切、起<sup>(10)</sup>煩惱<sup>(10)</sup>文。四住種子生<sup>(10)</sup>現行、起<sup>(10)</sup>煩惱<sup>(10)</sup>故。雖<sup>(10)</sup>云<sup>(10)</sup>住地、未<sup>(10)</sup>見<sup>(10)</sup>無明。持<sup>(10)</sup>四住<sup>(10)</sup>故、云<sup>(10)</sup>住地<sup>(10)</sup>耶。  
答。彼四住地、地之義<sup>(10)</sup>積也。非<sup>(10)</sup>無明住地<sup>(10)</sup>也。今無明住地義、持<sup>(10)</sup>四住<sup>(10)</sup>故也。但至<sup>(10)</sup>難者、經文既云<sup>(10)</sup>無明住地其力最大<sup>(10)</sup>。非<sup>(10)</sup>顯<sup>(10)</sup>此義<sup>(10)</sup>耶。故今論引<sup>(10)</sup>此文、成<sup>(10)</sup>彼義<sup>(10)</sup>也。故具經文云、無明住地力於有愛數四住地其力最勝。恒沙等數上煩惱依。亦令<sup>(10)</sup>四種煩惱久住<sup>(10)</sup>文。

【校勘】

- (1) 積…東・積、慈一尺、慈<sup>(10)</sup>注惟慧房元文五年之校本真俗雜記問答抄第三、海〇積、長尺、以下示さず。
- (2) 第…種<sup>(10)</sup>注八左、長なし。
- (3) 四持四重担故名住地事…長四重担事。
- (4) 問…長四重担者源、真四十八問四重担者源。  
口注論第四之一開解抄第十五（二十八紙右）。
- (5) 鬘…底種海長万、以下示さず。
- (6) 為顯…長明。
- (7) 含多法義…真含多義、長なし。
- (8) 譬…種住地、長種說。
- (9) 譬…種無明。
- (10) 說…海なし。
- (11) 正…底種東慈海長真生、文意により改む。
- (12) 法生…長真法、海補人天三乘。
- (13) 譬…種なし。
- (14) 担…種持。

- (15) 是則撰く担也是…長見其説文。
- (16) 譬…種海長なし。
- (17) 今何…長以彼。
- (18) 譬…種なし。
- (19) 地…長地者何。
- (20) 耶…底種乎、以下示さず。
- (21) 憑…長なし。
- (22) 論説事随…長論随事。
- (23) 宜…海義転用、口義。
- (24) 転換説く事也故…底種東慈なし。海長真により補う。
- (25) 彼…長なし。
- (26) 貝…底自、底注貝、種慈具。底注東海長真により改む。
- (27) 糶…種米十末、東口、海なし、長沫、慈真抹。
- (28) 雪…底なし、底注雪。
- (29) 譬…長譬々、真なし。
- (30) 随義…慈真随宜、長又。
- (31) 四…慈なし、慈注四イ、海法。
- (32) 也…長なし。
- (33) 今…海委小間此。
- (34) 又随…長然。
- (35) 宜…底東口義、長なし、種慈海真により改む。
- (36) 転用…長なし。
- (37) 也…海故。
- (38) 過…底種辺、長失、東慈海真により改む。
- (39) 勝鬘白く復演説…海なし。
- (40) 白…海真向。
- (41) 仏…種法。
- (42) 曰…海長法曰。
- (43) 更…種受。
- (44) ○…海長なし。
- (45) 法…種なし。
- (46) 無量…慈なし、慈注無量イ、長得無量。
- (47) 得…長なし。
- (48) 譬…海又、海注第二。
- (49) 内…底関、長なし、真初。



- (50) 雨…種兩。  
 (51) 福…種移。  
 (52) 雨又…底注第二、慈由又、慈注雨イ、長宝亦。  
 (53) 成…慈注時イ、長なし。  
 (54) 時…慈なし。  
 (55) 雨大水…通之力…海なし。  
 (56) 及四…種反。  
 (57) 州…慈列。  
 (58) 藏…慈識。  
 (59) 又…底注海注第三。  
 (60) 持…真注開解抄十五二十九丁右。  
 (61) 一…慈注已下四行半以イ本釈曰文。  
 (62) 大海…底東慈一海、長真海。種東注海により改む。  
 (63) 非法衆…成就之…長真正法衆生以善根力成人天果。  
 (64) 声聞…底耳耳、底注声聞、以下示さず。  
 (65) 授…底海撰、海注授求。
- (66) 以…長真なし。  
 (67) 又…底注海注第四。  
 (68) 藏…海藏云々。  
 (69) 何等為…羅蜜文…海なし。  
 (70) 四…東長四一、慈注四一イ。  
 (71) 撰…底種東海真授、慈長により改む。  
 (72) 得…真なし。  
 (73) 衆…長なし。  
 (74) 撰受正法…長なし。  
 (75) 聞…種間。  
 (76) 与…種歟、長受。  
 (77) 以…慈仏、慈注本不分明・以イ。  
 (78) 宝…東授、慈最、慈注宝力。  
 (79) ○撰受正法…長々々々々々。  
 (80) 窟…種東藏、慈堀。  
 (81) 末…海末釈云々、海以下なし。  
 (82) 曰含…長なし。  
 (83) 興雲注…種東雲註、真興注。  
 (84) 又云又…輕又云…長なし。

- (85) 如…種東如来。
- (86) 曰…真同。
- (87) 亦…種東示。
- (88) 出人人…種於全、東於人々、慈注於イ人人。
- (89) 呪…口況。
- (90) 如…慈世。
- (91) 能…種なし。
- (92) 持…慈真転、慈注持イ。
- (93) 言…底云、種東慈真により改む。
- (94) 輕…東なし。
- (95) 薩…種東薩人。
- (96) 爾…底亦、種東慈真により改む。
- (97) 夫所…慈真夫、慈注夫所イ。
- (98) 作…慈注未詳。
- (99) 譬…真喻。
- (100) 輕…真なし。
- (101) 与…種歟。
- (102) 既…種尤。
- (103) 至…慈経、長異。
- (104) 静…種東淨。
- (105) 称…底種慈真禪、長名、東により改む。
- (106) 即…慈長即彼。
- (107) 波…慈なし。
- (108) 文…長真文已上文宝窟文釈也以下引準知之。
- (109) 又疑云く久住文…長なし。
- (110) 云…底慈真なし、慈注云イ。種東慈により補う。
- (111) 住…真なし。
- (112) 住…底なし、底注住。
- (113) 生…慈なし、慈注生イ。
- (114) 起…真記。
- (115) 地之…真之地之。
- (116) 既…種尤。
- (117) 頭…慈真なし、慈注頭イ。
- (118) 論…慈真為、慈注論イ。
- (119) 力於有…慈力、慈注力於イ。
- (120) 数…慈真敬。
- (121) 久…慈真なし、慈注文イ。

【訓読】

『釈論』<sup>①</sup>第四に持四重担の故に住地と名づくの事

問ふ。『勝鬘經』<sup>③</sup>中に、摂受正法は多法を含みて義を顕せむが為に四譬を挙げるの中に、第三の譬説あり。是れ則ち摂受正法の四乗を生ずるを、地の四重担を持するに譬へるなり。是れ能く持する所は同じく功德法門の譬なり。今何ん。五住地<sup>④</sup>に譬ふなり。

答ふ。論師人師は經論の説に依憑する事、宜しきに随ひて轉換して之を説くこと常の事なり。故に彼の天台の『止観』<sup>⑤</sup>に『涅槃經』<sup>⑥</sup>の貝螺雪鶴を以て四德に譬ふ。義に随ひて転用し、四教四門に譬ふなり。今又た、宜しきに随ひて転用するなり。仍つて過無し。

『勝鬘經』<sup>③</sup>に云く、勝鬘が仏に白して曰く、当に我れ仏の神力を承くべし。更に復た演説せん。○。

摂受正法の广大義とは、則ち是れ無量得なり。一切仏法は八万四千の法門を摂すること。譬へば劫内に成ずる時、善く大雲を興して衆色の雨、及び種々の宝を雨らすが如し。是の如き摂受正法は、無量の福報、及び無量の善根の雨を雨らす。又劫の初めに成ずる時、大水聚を雨らし、三千大千界蔵、及び四百億種々の類州を出生するが如し。是の如き摂受正法は、大乘無量界蔵と一切菩薩神通力を出生するなり。○。又た大地四重担を持するが如し。何等を四と為す、一は大海、二は諸山、三は草木、四は衆生なり。是の如き摂受正法は、善男子善女人よ、大地を建立し、能く四種重任を荷負するに堪ふことを、彼の大地に踰へたり。何等を四と為す。謂はく善知識を離れて、非法を聞くこと無くむば衆生は人天善根を以て、而も之を成就す。声聞を求む者には、声聞乗を授く。縁覺を求む者には、縁覺乗を授く。大乘を求む者は、大乘を以て授く。是れを摂受正法と名づく。○。

又た大地に四種の宝蔵有るが如し。何等を四と為すは、無価、二は上価、三は中価、四は下価なり。是

れを大地の四種宝蔵と名づく。是の如き摂受正法は、善男子善女人よ、大地を建立し、衆生の四種の最上の大宝を得せしめむ。何等を四と為す。摂受正法なり。善男子善女人よ、非法を聞くこと無くむば衆生は人天功德の善根を以て、而も之を摂与す。声聞を求む者には、声聞乘を授く。縁覚を求む者には、縁覚乘を授く。大乘を求む者には、大乘を以て授く。是の如く大宝を得。衆生は皆摂受正法の由なり。

○。摂受正法とは、即ち是れ波羅蜜なりと文リ。

『宝窟』<sup>9</sup>中の末に云く、初門に四譬有り。曰く第一に興雲注雨の譬を含み、第二に大水出生世界の譬、第三に大地能持重担の譬、第四に大地有四宝蔵の譬と文リ。

又た云く、又大地の如しとは、上は雲水の出生を明す。曰く含蔵即ち是れ雲水を用ふなり。地を成すを以て、今は地亦た荷負の義有るを明す。上は正法を摂受して五乗を出生することを明す。今は正法を摂受、以て人を成出するを明す。人にも亦た荷負の義有り。故に地を以て人を呪ふ。地の能く四重担を持するが如し。正法を得るは、菩薩も亦た四種の人を利益す。大地は即ち是れ能持なり。四重担は即ち是れ所持なり。有る人の言く、大海は最も重くして、凡夫に喩ふ。諸山は次に軽く、声聞に喩ふ。草木転た軽く、縁覚に喩ふ。衆生最も軽く、菩薩に喩ふ。今明すこと爾らず。大海最も重く、菩薩に喩ふ。諸山重しと雖も、猶ほ大海より軽く、縁覚に喩ふ。草木は諸山より軽く、声聞に喩ふ。衆生は復た草木より軽く、凡夫に喩ふ。所以ゆる此の譬を作すに物の重きは徳の重きに喩へ、物の軽きは徳の軽きに喩ふと文リ。

又た云く、問ふ。摂受は是れ能く摂受の智なり。正法は是れ六度の行なり。智と行、既に不二玄門に至る。一智体は即ち一切行を具す。

答ふ。一正観の如き止惡の義辺をば説きて名づけて戒と為す。澄靜の義辺を、之を名づけて定と為す。能照の義辺を、之を称して恵と為す。達到的義辺、即ち彼の波羅蜜なり。是の故に一智に一切行を摂すと

文り。

又た疑ひて云く、『勝鬘經』<sup>12</sup>に云く、四種住地は一切を生じ、煩惱を起こすと<sup>文り</sup>。四住種子は現行を生じ、煩惱を起こす故に。住地と云ふと雖も、未だ無明を見ず。四住を持するが故に、住地と云ふや。

答ふ。彼の四住地、地の義を積するなり。無明住地には非ざるなり。今無明住地の義、四住を持するが故なり。但し難に至つては、『經』<sup>13</sup>の文に既に無明住地其力最大と云ふ。此の義を顯すに非ずや。故に今の『論』<sup>14</sup>に此の文を引きて、彼の義を成ずるなり。故に具さに『經』<sup>15</sup>の文に云く、無明住地の力は有愛と数との四住地に於いて其の力最勝なり。恒沙に等しき数の上の煩惱の依たり。亦た四種の煩惱をして久しく住せしむと<sup>文り</sup>。

【注釈】

- (1) 『釈論』第四…筏提摩多訳『釈摩訶衍論』卷四（大正三二・六二五頁上）
- (2) 四重担…求那跋陀羅訳『勝鬘師子吼一乘大方便方広經』（以下、『勝鬘經』）卷一「摂受章」第四（大正一二・二一八頁中）に登場する譬喩で、大地は①大海・②諸山・③草木・④衆生の四種の大きな重荷を支えているので四重担という。この概念を『釈摩訶衍論』においても援用している。
- (3) 『勝鬘經』…『勝鬘經』卷一「摂受章」第四（大正一二・二一八頁上取意）
- (4) 五住地…五住地惑のこと。衆生を三界の生死に執着させる煩惱のこと、①見一切処住地・②欲愛住地・③色愛住地・④有愛住地・⑤無明住地の五種類の惑をいう。
- (5) 『止観』…智顗説『摩訶止観』卷三（大正四六・二六頁下）
- (6) 『涅槃經』…曇無讖訳『大般涅槃經』（以下、『涅槃經』）卷一四「聖行品」第七之四（大正一二・四

四六頁下（四四七頁上）等の取意。

- (7) 貝糞雪鶴…『涅槃經』所説の衆生に涅槃の四徳である常樂我淨を説示する際、盲人に乳色を伝えるために白い物の例を四種示す譬え。空海撰『弁頭密二教論』卷上（弘全一・四八二頁）にも天台の三諦義を提示するために『摩訶止観』卷三を引用している。

- (8) 『勝鬘經』…『勝鬘經』卷一「摂受章」第四（大正一二・二一八頁上（中））  
(9) 『宝窟』中の末…古藏撰『勝鬘宝窟』卷中之本（大正三七・三〇頁中）  
(10) 又た云く…『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・三二頁中）  
(11) 又た云く…『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・三四頁上）  
(12) 『勝鬘經』…『勝鬘經』卷一「摂受章」第四（大正一二・二二〇頁上）  
(13) 『經』…『勝鬘經』卷一「摂受章」第四（大正一二・二二〇頁上）  
(14) 『論』…『釈摩訶衍論』第四（大正三二・六二五頁中）  
(15) 『經』…『勝鬘經』卷一「摂受章」第四（大正一二・二二〇頁上）

### 【解説】

『釈摩訶衍論』卷四所説の「無明力大故、住持諸染法」。如地持四担。故名為住地」という偈文を解釈する条目である。『釈摩訶衍論』卷四においても『勝鬘經』卷一を引用し、説明している箇所である。

本条目冒頭に付される〔長注〕を確認すると頼瑜撰『釈摩訶衍論開解鈔』卷一五に關する注記がみられる。そこで、『釈摩訶衍論開解鈔』卷一五（日藏四五・六九頁下）を確認すると『勝鬘宝窟』等の本条目

と同様の引用箇所が認められ、『真俗雜記問答鈔』卷三との関連性が伺える。しかし、『釈摩訶衍論開解鈔』には普観述『釈摩訶衍論記』や志福撰『釈摩訶衍論通玄鈔』等の引用も見受けられるため、本文が完全に一致しているわけではない。

『釈摩訶衍論』卷四において、根本無明の力の大きさを表現するにあたり、根本無明を無明住地と称している。住地と称することに対して、大地が四種類の大きな重荷を支えているという譬えを用いて説明している。具体的には、①大海②諸山③草木④衆生の四種の大きな重荷を支えていることから、①欲愛住地②色愛住地③有愛住地④見一処住地という四種の住地があるとされる。そこで、これら四種の住地のことを合わせて無明住地と呼ぶのかという議論が生じている。

また、同時に大地は四種の宝を蔵しており、八万四千の一切仏法なる正法が摂受されているため、声聞・縁覚・菩薩・大乘等が出生するとされている。

これらの問題について、『釈摩訶衍論』卷四に引用される『勝鬘經』の注釈書である『勝鬘宝窟』卷中之末における対応箇所を列記することにより、それらに挙げられる種々の譬えを紹介している。

本条目は、頼瑜が『釈摩訶衍論開解鈔』執筆の際に、手控えとして活用していたのではないかといった想像を掻き立てられるものである。

（小宮俊海）

【本文】

又宝窟云、次約「<sup>①</sup>麁細分別地起無明」<sup>②</sup>、是地四住煩惱為<sup>③</sup>起<sup>文</sup>。  
又云、無明住地無始能生。是地恒沙煩惱、從<sup>④</sup>「無明」生為<sup>⑤</sup>起<sup>文</sup>。今論証「無等等生」。自体経譬、如<sup>⑥</sup>「天魔波」

旬等<sup>(1)</sup>文、全同<sup>(2)</sup>勝鬘經譬<sup>(3)</sup>、如<sup>(4)</sup>惡魔波旬等說<sup>(5)</sup>。故知<sup>(6)</sup>。天魔波旬等文、顯<sup>(7)</sup>無明生<sup>(8)</sup>四住<sup>(9)</sup>之義<sup>(10)</sup>也。但至難者、經初文、釈<sup>(11)</sup>四住地義<sup>(12)</sup>、非<sup>(13)</sup>遮<sup>(14)</sup>無明住地義<sup>(15)</sup>也。仍無異<sup>(16)</sup>。

宝窟云、問曰、住中有<sup>(17)</sup>住有<sup>(18)</sup>起。無明中何故說<sup>(19)</sup>住不<sup>(20)</sup>說<sup>(21)</sup>起。

答。以<sup>(22)</sup>無明住地、更無<sup>(23)</sup>別起<sup>(24)</sup>。故不<sup>(25)</sup>衍說<sup>(26)</sup>。起品以<sup>(27)</sup>落<sup>(28)</sup>所判<sup>(29)</sup>、見愛等通說、為<sup>(30)</sup>無明所起<sup>(31)</sup>也<sup>(32)</sup>。

又云、譬說惡魔喻<sup>(33)</sup>無明地<sup>(34)</sup>、魔名<sup>(35)</sup>殺者<sup>(36)</sup>、波旬此云<sup>(37)</sup>極惡<sup>(38)</sup>。○此天有<sup>(39)</sup>六種勝<sup>(40)</sup>、一色勝<sup>(41)</sup>。色中有<sup>(42)</sup>二。

一資色。○二青<sup>(43)</sup>・黃等色<sup>(44)</sup>。○三力勝<sup>(45)</sup>。四眷屬勝<sup>(46)</sup>。五衆具勝<sup>(47)</sup>。六自在勝<sup>(48)</sup>。應有<sup>(49)</sup>壽命勝<sup>(50)</sup>。○色力壽命

者正報勝也。眷屬衆具者依報勝<sup>(51)</sup>文。

勝鬘經云、有<sup>(52)</sup>煩惱<sup>(53)</sup>。是阿羅漢<sup>(54)</sup>・辟支仏所<sup>(55)</sup>不<sup>(56)</sup>能斷<sup>(57)</sup>。煩惱有<sup>(58)</sup>二種<sup>(59)</sup>。何等為<sup>(60)</sup>二。謂、住地煩惱及起煩惱。

住地有<sup>(61)</sup>四種<sup>(62)</sup>。何等為<sup>(63)</sup>四。謂見<sup>(64)</sup>一切處住地<sup>(65)</sup>、欲愛住地<sup>(66)</sup>、色愛住地<sup>(67)</sup>、有愛住地<sup>(68)</sup>。此四種住地生<sup>(69)</sup>一切起煩

惱<sup>(70)</sup>。起者、剎那心剎那相応<sup>(71)</sup>。世尊、心不<sup>(72)</sup>相応<sup>(73)</sup>、無始無明住地<sup>(74)</sup>。此四種住地力<sup>(75)</sup>、一切上煩惱依種<sup>(76)</sup>。此無

明住地、算數譬喩所<sup>(77)</sup>不<sup>(78)</sup>能<sup>(79)</sup>。故世尊、如<sup>(80)</sup>是無明住地力<sup>(81)</sup>於<sup>(82)</sup>有愛數<sup>(83)</sup>四住地<sup>(84)</sup>。無明住地、其力最大。譬、如<sup>(85)</sup>

惡魔波旬、於<sup>(86)</sup>他化自在天<sup>(87)</sup>、色力<sup>(88)</sup>・壽命<sup>(89)</sup>・眷屬<sup>(90)</sup>・衆具自在殊勝<sup>(91)</sup>。如<sup>(92)</sup>是無明住地力<sup>(93)</sup>、於<sup>(94)</sup>有愛數<sup>(95)</sup>四住地<sup>(96)</sup>、

其力、最勝<sup>(97)</sup>。恒沙等數上煩惱依<sup>(98)</sup>。亦令<sup>(99)</sup>四種煩惱久住<sup>(100)</sup>。阿羅漢、辟支仏智所<sup>(101)</sup>不<sup>(102)</sup>能斷<sup>(103)</sup>、唯有<sup>(104)</sup>如來<sup>(105)</sup>菩提

智之所<sup>(106)</sup>能斷<sup>(107)</sup>。如是世尊、無明住地最為<sup>(108)</sup>大力<sup>(109)</sup>文。

宝窟中末云、第二得名門。若依<sup>(110)</sup>初解<sup>(111)</sup>、見<sup>(112)</sup>於一理<sup>(113)</sup>名<sup>(114)</sup>見一處<sup>(115)</sup>。此從<sup>(116)</sup>能治<sup>(117)</sup>得名<sup>(118)</sup>。若依<sup>(119)</sup>後言<sup>(120)</sup>、五利煩

惱名<sup>(121)</sup>見<sup>(122)</sup>、見道時、一切併斷<sup>(123)</sup>名<sup>(124)</sup>見一處住地<sup>(125)</sup>。此從<sup>(126)</sup>能治所治<sup>(127)</sup>、合論也。若四住地為<sup>(128)</sup>二住地<sup>(129)</sup>、謂、見与

愛離愛為<sup>(130)</sup>三<sup>(131)</sup>、以<sup>(132)</sup>見為<sup>(133)</sup>一故名<sup>(134)</sup>見一處住地<sup>(135)</sup>。此則当体<sup>(136)</sup>、從<sup>(137)</sup>處得名<sup>(138)</sup>。余三住地当体立名<sup>(139)</sup>。後一以<sup>(140)</sup>過患

為<sup>(141)</sup>目<sup>(142)</sup>。三釈之中、以<sup>(143)</sup>後意<sup>(144)</sup>為<sup>(145)</sup>正。所以然<sup>(146)</sup>者、今、釈<sup>(147)</sup>四住煩惱<sup>(148)</sup>、惣品忘<sup>(149)</sup>從<sup>(150)</sup>惑立<sup>(151)</sup>名<sup>(152)</sup>。豈<sup>(153)</sup>得<sup>(154)</sup>就<sup>(155)</sup>一般

若<sup>(156)</sup>解<sup>(157)</sup>或合釈<sup>(158)</sup>上<sup>(159)</sup>也<sup>(160)</sup>文。



又云、第三明体門。八十八使為「見一處住地體」<sup>(95)</sup>。貪・瞋・慢・無明の四使為「欲愛住地體」<sup>(96)</sup>。愛・慢・無明三使為「色・有二住地體」<sup>(97)</sup>。若以「愛・見二法」為「體者」<sup>(98)</sup>、三界見為「見一處住地體」<sup>(99)</sup>、三界愛為「三住地體」<sup>(100)</sup>。所以合「見而離」愛者、正欲彰「愛過患」<sup>(101)</sup>。潤業潤生皆由於「愛」故、今此經正明「愛生義」<sup>(102)</sup>。故広彰「愛也」<sup>(103)</sup>。又衆生多起於「愛」少起於「見」<sup>(104)</sup>。是故合「見而離」愛也<sup>(105)</sup>。

又云、第四地起門。有二種<sup>(106)</sup>。一同類分別、五住種子能生為「地」、上心所生為「起」<sup>(107)</sup>。二異類分別、四住地中見一處為「地」、三住地從「見一處住地」起名<sup>(108)</sup>起。故雜心云、見諦所斷是一切染汚因<sup>(109)</sup>。又無明住地無明始能生是地。恒沙煩惱從「無明」生為「起」<sup>(110)</sup>。次約「麤細」分「別地起」<sup>(111)</sup>、無明是地、四住煩惱為「起」<sup>(112)</sup>。又有人言、○。彼事識中、取性煩惱名為「性惑」、說之為「地」<sup>(113)</sup>。余見愛等緣「境別生說為「事識」<sup>(114)</sup>、通名為「起」<sup>(115)</sup>。彼取性無明者、馬論中名「執取相」、亦名「執取相不染」<sup>(116)</sup>。余見愛等、馬論中計名字相。尋「名計」我。及生「諸結」一名「計名字」<sup>(117)</sup>文。

又云、第五相応不相応門者、一就下作「緣念」法<sup>(118)</sup>上「相応不相応」<sup>(119)</sup>。不相応不作「緣念」法。不相応即五位種子<sup>(120)</sup>是也。上心說「相応」<sup>(121)</sup>。故此文云「起者刹那心相応」<sup>(122)</sup>。無始無明不相応、恒沙煩惱是相応。二「麤細分」<sup>(123)</sup>。四住起是相応。以「麤故」<sup>(124)</sup>。無明不相応。以其「細故」<sup>(125)</sup>。起信論云、「麤惑名「相応」<sup>(126)</sup>。細惑名「不相応」<sup>(127)</sup>」文。

大乘義疏云、刹那心者謂「識心」、相応者謂「受・想・行・識等」<sup>(128)</sup>。心不相応者根本心無「四心相応」<sup>(129)</sup>。無始者無「始」於「已」<sup>(130)</sup>文。

又云、就「釈」煩惱、又為「三」<sup>(131)</sup>。一別明「四住」<sup>(132)</sup>。二心不相応無始已下、別彰「無明」<sup>(133)</sup>。三此住地力下、四住・無明相對弁異。就「釈」四住<sup>(134)</sup>中有「三」煩惱有二種、謂標數也<sup>(135)</sup>。何等為二下、第二別名也<sup>(136)</sup>。住地有四種下、第三広釈。釈上二門即二。一「釈」住地章門、次「釈」起章門<sup>(137)</sup>。○。第三弁「四住与「無明」優劣」<sup>(138)</sup>。○。就中、前彰「四住之力不及「無明」、後說「無明勝過四住」<sup>(139)</sup>」文。一是無明住地下。

【校勘】

⑨には該当箇所なし。

- (1) 又宝窟く中末云…長なし。
- (2) 窟…底種崛、東慈真により改む。
- (3) 庵…種なし。
- (4) 住…慈真種。
- (5) 無…真なし。
- (6) 始…種なし。
- (7) 從…種徒。
- (8) 起…真記。
- (9) 波…慈彼。
- (10) 波…慈彼。
- (11) 知…慈真出、慈注知イ。
- (12) 波…慈彼。
- (13) 顯…慈注類イ。
- (14) 住…真位。
- (15) 之…慈なし、慈補之。
- (16) 初…種約。
- (17) 遮…種遷。

- (18) 異…口失。
- (19) 窟…底種東崛、慈真により改む。
- (20) 問…種なし、種補問。
- (21) 曰…種なし、種補云、真云、口四。
- (22) 無…種なし。
- (23) 起…真記。
- (24) 品…慈所。
- (25) 落…東真前。
- (26) 文…種なし
- (27) 又…底注東注慈注無等等生住地可引、真注無等等生住地文可引。
- (28) 云…底注無等等生住地可引、種注文無等等生住地可引。
- (29) 殺…底種敬、底注東慈真により改む。
- (30) 波…慈彼。
- (31) 天…種天者。
- (32) 有…慈有衍文。
- (33) 勝…真なし。

- (34) 中…種なし。  
(35) 一…種なし。  
(36) 二…種東二者。  
(37) 黄…底慈茨、種東真により改む。  
(38) 四…種なし。  
(39) 勝…真なし。  
(40) 衆…種種。  
(41) 者…東有。  
(42) 者…口在。  
(43) 報勝…種東勝報。  
(44) 鬘…底種東万、慈真により改む。  
(45) 辟…種譬。  
(46) 所…真なし。  
(47) 煩…慈なし。  
(48) 切…底種東慈なし、真により改む。  
(49) 住地…真煩惱。  
(50) 色愛…種なし。  
(51) 住地…種なし、真煩惱。  
(52) 住地…真煩惱。  
(53) 切…慈切一切。  
(54) 心刹那…慈なし、慈補心刹那イ。  
(55) 此…種なし。  
(56) 四…底東慈真なし、種口により改む。  
(57) 是…慈は無是。  
(58) 有…慈注イ。  
(59) 波…慈彼。  
(60) 有…慈真なし、慈補有イ。  
(61) 羅…東釋、東注羅。  
(62) 断…真断四。  
(63) 提…種慈狎。  
(64) 為…種なし。  
(65) 窟…底種東崛、慈屈、真により改む。  
(66) 見…長真者、口なし。  
(67) 後…長后。  
(68) 断…長断故。  
(69) 治…長なし。  
(70) 合…底種東慈真今、長口により改む。  
(71) 二…慈々、長なし。

- (72) 謂…長云。  
 (73) 愛…慈長なし。  
 (74) 三…長二。  
 (75) 從…種東徒。  
 (76) 後…種東得、長后。  
 (77) 一…東なし、東補一。  
 (78) 釈…底種東慈長尺、真により改む、以下示さず。  
 (79) 後…長后。  
 (80) 釈…長文、長注文如。  
 (81) 悩…長煩。  
 (82) 惣…真総。  
 (83) 品…長合。  
 (84) 從…慈長真住、慈注從イ。  
 (85) 立名…慈名立。  
 (86) 豈…種東是、慈注是イ。  
 (87) 得…長なし。  
 (88) 解…長得解。  
 (89) 或…長なし。

- (90) 合…長耶。  
 (91) 釈…長なし。  
 (92) 也文…長なし。  
 (93) 又云…長なし。  
 (94) 明…種名。  
 (95) 処…種度。  
 (96) 無…長无。以下示さず。  
 (97) 三…底慈真明、慈注三イ、種東慈注長により改む。  
 (98) 体…真なし。  
 (99) 彰…種慈真影。  
 (100) 業…慈生。  
 (101) 彰…種慈真影。  
 (102) 於…種なし。  
 (103) 文…慈文イ。  
 (104) 又云第く住地下…長なし。  
 (105) 地…口なし。  
 (106) 有…種者。  
 (107) 住…慈真位、慈注イ无。

- (108) 雑…底離、(底注)種東慈真により改む。  
(109) 諦…種諍。  
(110) 是…慈見、(慈注)是イ。  
(111) 汚…種肝。  
(112) 從…種住。  
(113) 麤…慈煩惱、(種)なし。  
(114) 細…種物。  
(115) 地…底種東慈真なし、(口)起、『大正』により補う。  
(116) 識…底種真議、(東慈口)により改む。  
(117) 識…底種東真議、(慈口)により改む。  
(118) 取…慈所。  
(119) 馬…慈持、(慈注)地歟、(慈注)尋本書。  
(120) 尋…底種東慈真碍、(口)等、『大正』により改む。  
(121) 結…慈注絡。  
(122) 計…種なし。  
(123) 弁…慈并。  
(124) 不相応…(口)なし。  
(125) 不…(東注)衍文歟。  
(126) 心…種なし。  
(127) 麤…種なし。  
(128) 分…東分別。  
(129) 住…東住地。  
(130) 麤…種なし。  
(131) 以…(慈注)故イ。  
(132) 故…種分。  
(133) 論…慈真なし。  
(134) 麤…種なし。  
(135) 謂…底慈真なし、(慈補)謂イ、(種東慈補口)により改む。  
(136) 応…底慈真慈、(種東)により改む。  
(137) 於…(真注)(ママ)。  
(138) 己…真已。  
(139) 又…(真注)校者曰宝窟中末。  
(140) 為…底種東慈真なし、(真注)為(大正蔵)、(真注)により改む。  
(141) 已…底種東慈真なし、(真注)已(大正蔵)、

〔真注〕により改む。

(142) 此…種なし。

(143) 三…慈二。

(144) 第…種なし、〔種補〕第。

(145) 釈…底〔種東〕慈真なし、〔真注〕釈（大正藏）、

〔真注〕により改む。

(146) 与…真なし。

(147) 就…底〔種東〕慈真然、〔口〕により改む。

(148) 彰…種〔慈影〕、〔慈注〕彰イ。

(149) 之…慈真三、〔慈注〕之イ。

### 【訓読】

又た『宝窟』<sup>(1)</sup>に云く、次に龜細分別地起の無明に約して、是の地四住煩惱の起と為すと<sup>文リ</sup>。

又た云く、無明住地は無始より能く生ず。是の地恒沙の煩惱、無明従り生じて起と為すと<sup>文リ</sup>。今の

『論』<sup>(4)</sup>に無等等の生を証す。自体『經』<sup>(5)</sup>の譬へ、天魔波旬等の如しの文、全く『勝鬘經』<sup>(6)</sup>の譬へに同じき

こと、惡魔波旬等の説の如し。故に知んぬ。天魔波旬等の文は、無明四住を生ずるの義を顯すなり。但だ

し難に至つては、『經』の初の文、四住地の義を釈して、無明住地の義を遮るに非ざるなり。仍つて異無

し。

『宝窟』<sup>(7)</sup>に云く、問ふて曰はく、住の中に住有りて起有り。無明の中何故に住を説きて起を説かざるや。

答ふ。無明住地は、更に別起無きを以ての故に説を衍めず。起品所判を落とすを以て、見愛等通説して、

無明所起と為すなりと<sup>文リ</sup>。

又た云く、譬説せば惡魔を無名地に喩へ、魔を殺者と名づけ、波旬をば此れを極惡と云ふ。○。此の天

に六種<sup>(10)</sup>の勝有り、一には色勝。色の中に二有り。一には資色。○。二には青・黃等の色。○。三には力勝。

四には眷屬勝。五には衆具勝。六には自在勝なり。応に壽命勝有るべし。○。色力壽命とは正報の勝なり。

眷属衆具とは依報の勝なりと<sup>文リ</sup>。

『勝鬘經』に云く、煩惱有り。是れ阿羅漢・辟支仏の断ずること能はざる所なり。煩惱に二種有り。何等を二と為さむ。謂はく、住地の煩惱と及び起煩惱なり。住地に四種有り。何等をか四と為さん。謂はく見一切処住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地なり。此の四種の住地は一切の起煩惱を生ず。起とは、刹那にして心の刹那と相応す。世尊よ、心と相応せざるは、無始の無明住地なり。此の四種の住地の力は、一切の上煩惱依の種なり。此の無明住地、算数譬喩も能はざる所なり。故に世尊よ、是くの如き無明住地の力は、有愛と数に於いて四住地なり。無明住地は、其の力最も大なり。譬へば、惡魔波旬の、他化自在天に於いて、色力・壽命・眷属・衆具の自在の殊勝なるが如し。是くの如き無明住地の力は、有愛と数との四住地に於いて、其の力、最勝なり。恆沙に等しき数の上の煩惱の依たり。亦た四種の煩惱をして久しく住せしむ。阿羅漢、辟支仏智の断ずる能はざる所にして、唯だ如来の菩提智のみ能く断ずる所なり。是の如く世尊よ、無明住地は最も大力と為すと<sup>文リ</sup>。

『宝窟』中「末」に云く、第二に得名門。若し初解に依らば、一理を見るを見一処と名づく。此れは能治に従つて名を得たり。若し後言に依らば、五利煩惱を見と名づけ、見道の時、一切併せ断ずるを見一処住地と名づく。此れは能治所治に従ひ、合論するなり。若し四住地を二住地と為さば、謂はく、見と愛と離愛とを三と為し、見を以て一と為すが故に見一処住地と名づく。此れ則ち当体にして、処に従つて名を得。余の三住地は当体に名を立つ。後の一は過患を以て目と為すなり。三釈の中、後意を以て正と為す。然る所以は、今、四住煩惱を釈するに、物品は応に惑に従つて名を立つべし。豈に、般若に就きて解し或いは合釈するを得んやと<sup>文リ</sup>。

又た云く、第三明体門。八十八使を見一処住地の体と為す。貪・嗔・慢・無明の四使を欲愛住地の体と

為す。愛・慢・無明の三使を色・有の二住地の体と為す。若し愛・見の二法を以て体と為さば、三界の見を見一処住地の体と為し、三界の愛を三住地の体と為す。見を合して愛を離する所以は、正しく愛の過患を彰さんと欲す。業を潤すも生を潤すも皆な愛によるが故に、今の此の経は正しく愛生の義を明すなり。故に広く愛を彰すなり。又た衆生は多く愛を起こし少しく見を起す。是の故に見を合して愛を離するなりと文り。

又た云く、第四地起門。二種有り。一には同類分別、五住種子の能生を地と為し、上心の所生なるを起と為す。二には異類分別、四住地の中の見一処を地と為し、三住地の見一処住地より起こるを起と名づく。故に『雜心』に云く、見諦所断は是れ一切染汚の因なりと。又た無明住地は無明より始む能生なれば是れ地なり。恒沙の煩惱は無明より生ずるを起と為す。次に麤細に約して地と起を分別すれば、無明は是れ地、四住の煩惱は起と為す。又た有る人の言はく、○<sup>(27)</sup>。彼の事識<sup>(28)</sup>の中、取性の煩惱を名づけて性惑と為し、之れを説いて地と為す。余の見愛等の境を縁じて別に生ずるを説いて事識と為し、通じて名づけて起と為す。彼の取性の無明とは、馬の『論』中には執取相と名づけ、亦た執取相応染と名づく。余の見愛等を、馬の『論』中には計名字相なり。名を尋ね我を計す。及び諸結を生ずるを計名字と名づくと文り。

又た云く、第五相応不相応門とは、一には縁念を作す法に就きて相応と不相応とを弁ず。不相応とは縁念を作さざる法なり。不相応は即ち五種の種子是れなり。上の心を相応と説く。故に此の文に起者刹那心相応と云ふ。無始無明は不相応、恒沙煩惱は是れ相応なり。二には麤と細に分かつ。四住起は是れ相応なり。麤を以ての故に。無明は不相応なり。其の細を以ての故に。『起信論』に云く、麤惑を相応と名づく。細惑は不相応と名づくと文り。

『大乘義疏』に云く、刹那心とは識心を謂ひ、相応とは受・想・行・識等を謂ふ。心不相応とは根本に



して応ちに四心の相応すること無し。無始とは己に始まり無しと文り。

又た云く、煩惱を積するに就いて、又た三と為す。一に別して四住を明かす。二に心不相応無始より已下は、別して無明を彰す。三に此の住地力より下は、四住・無明相對して異を弁ず。四住を積する中に就きて三有り。煩惱有二種とは、謂く数を標すなり。何等為二より下は、第二の別名なり。住地有四種より下は、第三の広積なり。上の二を積するに門は即ち二なり。一に住地章門を積し、次に起章門を積す。○。第三に四住と無明との優劣を弁ず。○。就中、前に四住の力は無明に及ばざることを彰し、後に無明四住に勝過することを説くと文り。一に是れ無明住地より下。

【注釈】

- (1) 『宝窟』…吉藏撰『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五一頁上）
- (2) 又た云く…『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五一頁上）
- (3) 無明住地…無知の根源であり、元々持っている煩惱、根本煩惱を無始の無明住地と言い、外部からの刺激に対して起ることのない不相応の煩惱のこと。
- (4) 『論』…龍樹菩薩造・筏提摩多訳『釈摩訶衍論』卷四（大正三二・六二四頁下）
- (5) 『經』…曇無讖訳『大般涅槃經』卷一四「聖行品」第七之四（大正一二・四四八頁中）を指すか。『釈摩訶衍論』卷四では「自体契經」となっている。
- (6) 『勝鬘經』…求那跋陀羅訳『勝鬘師子吼一乘大方便方広經』（以下『勝鬘經』）卷一「一乘章」第五（大正一二・二二〇頁上）
- (7) 『宝窟』…『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五二頁上）

現 (10) 譬説悪く依報勝…以下、挿入。

- (8) 譬説悪く依報勝…『勝鬘宝窟』卷中之末 (大正三七・五二頁中〜下)。『勝鬘經』卷一「一乘章」の中で、煩惱について解説している部分から、「惡魔波旬」以下 (大正一二・二二〇頁上) を解釈した箇所からの引用である。

- (9) 惡魔…『勝鬘經』で述べられる「惡魔波旬」の意味を解説している。惡魔波旬とはサンスクリット語の *pāpīyas* の主格 *pāpīyaṇ* の音写。『勝鬘經』で述べられる「惡魔波旬」とは、他化自在天 (有頂天) に住んでいる魔王を指している。

- (10) 六種の勝…魔王が他化自在天において、身体と容貌、力、眷属、衆具等が最も優れていることを解説している。

- (11) 『勝鬘經』…『勝鬘經』卷一「一乘章」第五 (大正一二・二二〇頁上)

- (12) 辟支仏…サンスクリット語の *pratyekabuddha* の音写。縁覚のこと。

- (13) 住地の煩惱…諸々の煩惱が起こるよりどころとなる潜在的煩惱。本条目では、見一切処住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地の四住地煩惱があることも説明されている。

- (14) 起煩惱…住地煩惱から生じる様々な煩惱。

- (15) 見一切処住地…偏見によって生じる煩惱。

- (16) 欲愛住地…欲界で生じる煩惱。

- (17) 色愛住地…色界で生じる煩惱。

- (18) 有愛住地…無色界で生じる煩惱。

- (19) 『宝窟』中之末…『勝鬘宝窟』卷中之末 (大正三七・五〇頁下)

- (20) 得名門…住持煩惱には五つの住持があり、四住地と無明住地に分ける事が出来る。『勝鬘宝窟』卷中之末では、五住持について釈名門、得名門、明体門、地起門、相応不相応門、依止門、門断惑位門、大意門の八つに分けて解説しており、本条目の引用は二つ目に当たる。
- (21) 五利煩惱…有身見、辺執見、邪見、見取見、戒禁取見の五見のこと。見惑・思惑の二惑のうち、見惑の煩惱をいう。尊者世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』卷一九（大正二九・九九頁上〜下）等では五見と訳されるが、吉藏は『法華玄論』卷五（大正三四・四〇四頁下）において「見謂<sub>二</sub>五利煩惱<sub>一</sub>謂<sub>二</sub>五鈍<sub>一</sub>」と五利煩惱と称している。
- (22) 能治所治…能治と所治は対の言葉で、能対治・所対治の略である。能治とは煩惱や悪を修行によって改めるものであり、所治とは修行によって改められるべきものをいう。
- (23) 般若…『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五〇頁下）には見られない。
- (24) 又た云く…『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五一頁上）
- (25) 又た云く…『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五一頁上〜中）
- (26) 『雑心』…尊者法救造・僧伽跋摩等訳『雑阿毘曇心論』のこと。尊者法勝造・僧提共慧遠訳『阿毘曇心論』の注釈書。『勝鬘宝窟』卷中之末では、『雑阿毘曇心論』卷四（大正二八・九〇〇頁下）の見諦所断の八十八使の煩惱についての部分から「見諦所断是一切穢汚法因」を引用している。
- (27) ○…『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五一頁上）によれば、「起有四种。一性事分别」が省略されており、地と起の一つ目について解説している。
- (28) 事識…本条では「事識」としているが、引用元の『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五一頁上）では「事惑」となっている。

(29) 馬の『論』…馬鳴菩薩造・真諦訳『大乘起信論』(大正三二・五七七頁上・下)の六染の解説の取意の文である。この引用について、平川彰(『仏典講座二二』大乘起信論 大蔵出版・一九八六年、一九二頁)は、「これは明らかに『大乘起信論』の「六染」の文章を指しているものである。『起信論』を「馬鳴の論」として、吉蔵が引用しているのは、『起信論』が馬鳴の作であることが、古くから確定していたことを示すものである」と指摘している。

(30) 結…煩惱の意。衆生を束縛し輪廻より解脱させないこと。

(31) 又た云く…『勝鬘宝窟』卷中之末(大正三七・五一頁中)

(32) 『起信論』…『大乘起信論』(大正三二・五七七頁下)の「一者<sub>レ</sub>麤、与<sub>レ</sub>心相応故。二者<sub>レ</sub>細、与<sub>レ</sub>心不相応故」取意の文を指すと考えられる。平川彰(『仏典講座二二』大乘起信論 大蔵出版・一九八六年、二〇四頁)は、先の『大乘起信論』の一文を受けていると指摘し、「吉蔵が『起信論』を利用していたことは明らかである」と述べている。

(33) 『大乘義疏』…伝聖徳太子撰『勝鬘經義疏』卷一(大正五六・一一頁上)

(34) 又た云く…『勝鬘宝窟』卷中之末(大正三七・五一頁下)

(35) 第三…『勝鬘宝窟』卷中之末(大正三七・五二頁中)

(36) 一に是れ無明住地より下…この一文の位置づけは難しいが、ここまで『勝鬘宝窟』卷中之末の引用文と見られる。けれども、直前に「文り」とついているため、頼瑜の地の文のように見えている。

## 【解説】

前に引き続き当該箇所は、『釈摩訶衍論』卷四所説の「無明力大故、住<sub>二</sub>持諸染法<sub>一</sub>。如<sub>三</sub>地持<sub>二</sub>四担<sub>一</sub>。故

名為「住地」(大正三二・六二五上)の解釈を行なった部分である。『釈摩訶衍論』卷四では、この偈頌の解説において、「勝鬘契經中作「如<sub>レ</sub>是說」、世尊、如<sub>レ</sub>是無明住地力於「有愛數四住地」、無明住地力其最大」(大正三二・六二五中)と述べ、『勝鬘經』卷一「一乘章」の「無明住地」についての一文をあげている。本条目では、主に「無明住地」について解釈しており、『勝鬘經』の注釈書である『勝鬘宝窟』を中心に引用している。

本条目が引用した『勝鬘經』卷一では、煩惱をまず起煩惱と住地煩惱の二つに分ける。そのうち住地煩惱をさらに四住煩惱(見一切処住地・欲愛住地・色愛住地・有愛住地)と無明住地に分けて、これらを五住地とする。なお、四住煩惱のうち、見一切処住地は見惑に相当し、愛欲住地・色愛住地・有愛住地は思惑に相当する。

それに対し、『勝鬘宝窟』卷中之末ではこの五住地を独自に八門に分けて解釈している。この八門とは①釈名門②得名門③明体門④地起門⑤相応不相応門⑥依止門⑦門斷惑位門⑧大意門をいう。頼瑜は、このうち②③④⑤の説明を必要に応じて引用している。

また、『勝鬘經』の「起者、刹那心刹那相応」(大正一二・二二〇頁上)の一文に対する解説として、『勝鬘經義疏』卷一から「刹那心者謂「識心」」(大正五六・一一頁上)以下の一文が引用されている。

(増山賢俊)

# 【本文】

又云、心王一念、縁<sub>レ</sub>境、煩惱法数、随<sub>レ</sub>心而起、同時不<sub>二</sub>相離<sub>一</sub>、故言「刹那相応」<sup>(1)</sup>。故馬鳴言、心異念異、而同知同縁名<sub>二</sub>相応染<sub>一</sub>。若非<sub>二</sub>起煩惱<sub>一</sub>、心自縁<sub>レ</sub>境煩惱不起、不<sub>二</sub>与<sub>レ</sub>心相応<sub>一</sub>。彼名<sub>二</sub>愛結<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>念也<sup>(2)</sup>。

又云、心不相応者、簡<sup>⑤</sup>上刹那心相応<sup>⑥</sup>、無始者、簡<sup>⑥</sup>心刹那刹那起<sup>⑦</sup>。若是起煩惱、与<sup>⑦</sup>心別体共心相応。此無明住地即指<sup>⑧</sup>妄想心体<sup>⑨</sup>以為<sup>⑩</sup>無明<sup>⑪</sup>。不下<sup>⑫</sup>別心外有<sup>⑬</sup>別教法<sup>⑭</sup>共心相応<sup>⑮</sup>。是故說為<sup>⑯</sup>心不相応<sup>⑰</sup>。故馬鳴言<sup>⑱</sup>、即<sup>⑲</sup>心不覺常無<sup>⑳</sup>別異<sup>㉑</sup>名<sup>㉒</sup>不相応<sup>㉓</sup>。此無明住地久來性成<sup>㉔</sup>、不下<sup>㉕</sup>同<sup>㉖</sup>起惑<sup>㉗</sup>作念現生<sup>㉘</sup>。故云<sup>㉙</sup>無始無明<sup>㉚</sup>。暗惑<sup>㉛</sup>之心体、無<sup>㉜</sup>惠明<sup>㉝</sup>故曰<sup>㉞</sup>無明<sup>㉟</sup>。為<sup>㊱</sup>彼恒沙起惑所依<sup>㊲</sup>。名<sup>㊳</sup>之為<sup>㊴</sup>住<sup>㊵</sup>。能生<sup>㊶</sup>恒沙<sup>㊷</sup>故稱為<sup>㊸</sup>地<sup>㊹</sup>文。

又云、於恒沙等數上煩惱依者、此弁<sup>㊺</sup>無明能生<sup>㊻</sup>恒沙<sup>㊼</sup>力<sup>㊽</sup>也。無明所<sup>㊾</sup>起<sup>㊿</sup>、衆多喻同<sup>㋀</sup>恒沙<sup>㋁</sup>。所<sup>㋂</sup>起增<sup>㋃</sup>種<sup>㋄</sup>故、名為<sup>㋅</sup>上菩提<sup>㋆</sup>。覆<sup>㋇</sup>於諸諸仏上法<sup>㋈</sup>故、名為<sup>㋉</sup>上也<sup>㋊</sup>。恒沙等惑依<sup>㋋</sup>無明<sup>㋌</sup>得<sup>㋍</sup>立<sup>㋎</sup>。故稱為<sup>㋏</sup>依<sup>㋐</sup>。亦令四種煩惱久住者、前明<sup>㋑</sup>四住煩惱<sup>㋒</sup>、但能与<sup>㋓</sup>彼四住所起<sup>㋔</sup>、為<sup>㋕</sup>依為<sup>㋖</sup>種<sup>㋗</sup>。其義則劣。無明住地能生<sup>㋘</sup>恒沙<sup>㋙</sup>故、能持<sup>㋚</sup>四住<sup>㋛</sup>。故名為<sup>㋜</sup>勝<sup>㋝</sup>文。

# 【校勘】

〔海長〕には該當箇所なし。

- (1) 法数…底(種東慈)数法、真により改む。
- (2) 時…種東なし。
- (3) 離…東応、(東注)離。
- (4) 言…底(真)云、(種東慈)により改む。
- (5) 那…底(種東刹那、慈)那那、真により改む。
- (6) 者…底(種東慈)之、真により改む。
- (7) 起…慈なし。
- (8) 別…真なし。
- (9) 言…底(慈真)云、(種東)により改む。
- (10) 成…底(種東慈真)成者、『勝鬘宝窟』卷中之末(大正三七・五二頁上)により改む。
- (11) 現…(種東慈)觀。
- (12) 云…(種東慈真)言。
- (13) 惑…(慈惑体、(慈注)惑行)文。
- (14) 曰…慈云。
- (15) 称…(種東慈)体。

(16) 弁…真なし。

(17) 力…口色。

(18) 明…種なし。

(19) 所…口不。

(20) 種…慈数。

(21) 諸…真なし。

(22) 名…慈なし。

(23) 但…真なし。

【訓読】

又た云く、心王の一念、境を縁するに、煩惱の法数、心に随つて起こり、同時に相離れず、故に刹那相応と言ふ。故に馬鳴の言に、心異と念異にして、而も同じく知り同じく縁するを相応染と名づく。若し起煩惱に非ざれば、心自ら境を縁じて煩惱起こらず、心と相応せず。彼の愛結を名づけて念と為すなりと文り。

又た云く、心不相応とは、上の刹那心相応を簡ひ、無始とは、心の刹那刹那起を簡ふ。若し是れ起煩惱ならば、心と別体にして共に心と相応す。此の無明住地は即ち妄想の心体を指して以て無明と為す。別して心外に別の数法有りて共に心と相応せず。是の故に説いて心不相応と為す。故に馬鳴の言に、心に即する不覺にして常に別異無きことを不相応と名づく。此の無明住地は久来性成にして、起惑と同じく作念現生せず。故に無始無明と云ふ。暗惑の心体、恵明無きが故に無明と曰ふ。彼の恒沙の起惑の所依と為す。これを名づけて住と為す。能く恒沙を生ずるが故に称して地と為すと文り。

又た云く、於恒沙等数上煩惱依とは、此れは無明能く恒沙を生ずる力を弁ずなり。無明の起こす所、衆多にして喩へば恒沙に同じ。起こす所の種を増すが故に、名づけて上の菩提と為す。諸仏の上法を覆ふが故に、名づけて上と為すなり。恒沙等の惑は無明に依りて立つることを得る。故に称して依と為す。亦令

四種煩惱久住とは、前に四住の煩惱を明かすも、但だ能く彼の四住所起と、依と為し種と為す。其の義則ち劣なり。無明住地能く恒沙を生ずるが故に、能く四住を持す。故に名づけて勝<sup>文リ</sup>と為すと。

【注釈】

- (1) 又た云く…吉藏撰『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五一頁下）
- (2) 馬鳴の言…馬鳴撰・真諦訳『大乘起信論』卷一に、「言<sup>二</sup>相応義<sup>一</sup>者、謂心念法異。依<sup>二</sup>染淨差別<sup>一</sup>、而知相縁相同故。」（大正三二・五七七頁下）とある。
- (3) 愛結…妄執の束縛。
- (4) 又た云く…吉藏撰『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五二頁上）
- (5) 心不相応…心と相伴う關係にないもの。物や心ではない、それらの間の関係や力、概念のような特殊なものを意味する。『阿毘達磨俱舍論』卷四に「心不相応行 得非得同分 無想二定命 相名身等類。論曰、如<sup>レ</sup>是諸法心不<sup>二</sup>相応<sup>一</sup>、非<sup>二</sup>色等性<sup>一</sup>行蘊所攝。是故名<sup>二</sup>心不相応行<sup>一</sup>。」（大正二九・二二頁上）とある。
- (6) 馬鳴の言…馬鳴撰・真諦訳『大乘起信論』卷一に、「不相応義者、謂即<sup>レ</sup>心不覺常無<sup>二</sup>別異<sup>一</sup>」（大正三二・五七七頁下）とある。
- (7) 不相応…本条目には「不相応」とあるが、『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五二頁上）には「相応」とある。
- (8) 無明住地…一切煩惱の根本。如来の菩提智のみ能くこれを断ずるものであるため明という。
- (9) 作念…心の中で考えること。
- (10) 又た云く…吉藏撰『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五二頁下）



- (11) 種…本条目には「種」とあるが、『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五二頁下）には「強」とある。  
 (12) 菩提…本条目には「菩提」とあるが、『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五二頁下）には「且」とある。

【解説】

ここで示す本文は、先より続く「釈論第四持四重担故名住地事」という条目の一部である。したがって本文も、『釈摩訶衍論』卷四の偈文、「無明力大故、住持諸染法」。如<sub>三</sub>地持<sub>三</sub>四担<sub>三</sub>。故名為<sub>三</sub>住地<sub>三</sub>」（大正三二・六三一頁中）の解説といえる。

先の解説のように、この偈文は『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』（以下、『勝鬘経』）を典拠に説かれている。ここでは、その『勝鬘経』より「起者刹那心刹那相応」（大正一二・二二〇頁上）、「世尊、心不相応無始無明住地」（同上）、「恒沙等数上煩惱依」（同上）、「亦令<sub>三</sub>四種煩惱久住<sub>三</sub>」（同上）について、『勝鬘経』の注釈書である『勝鬘宝窟』を用いている。

頼瑜はこれらを用いて、相応心・不相応心、そしてこれらを区別する無始無明についてまとめている。相応心とは煩惱と相応する心で、そうでない心を不相応心という。しかし『大乘起信論』（以下、『起信論』）には、「言<sub>三</sub>相応義<sub>三</sub>者、謂<sub>三</sub>心念法異。依<sub>三</sub>染淨差別<sub>三</sub>。而知相縁相同故。不相応義者、謂<sub>三</sub>即<sub>三</sub>心不覺常無<sub>三</sub>別異<sub>三</sub>、不<sub>レ</sub>同<sub>三</sub>知相縁相<sub>三</sub>故<sub>三</sub>」（大正三二・五七七頁下）とある。つまり、自性清浄心と無明と和合することを認め、既に和合して常に別異はなく、知相縁相を同ぜざるが故に不相応と名づくとし、不相応の義を知相縁相の不平等に帰せるという。しかしながら、本条目から頼瑜の私見はみられない。

そこで、『釈摩訶衍論開解鈔』（以下、『開解鈔』）を用いて頼瑜の私見を補完すれば、卷二〇に「私云、

不相応者、王所相応微細、而行相所縁、俱不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知。故云<sub>二</sub>不相応<sub>一</sub>也。不同<sub>二</sub>相応所縁行相可<sub>レ</sub>知故也。  
(日藏四五・一六五頁下)とある。ここでは、心不相応を無始無明住地のことといい、心王と心所が相応して起こるのではなく、根本無明によるものと述べている。したがって、種々の起煩惱の刹那心との刹那相応とは異なる。一切の起煩惱は、刹那刹那に起こるものであるが、無明はその根本で始めから心の中にあるという。

(中村賢識)

## 五〇、因不如故得起而有事

### 【本文】

因<sup>①</sup>不如<sup>②</sup>故得<sub>レ</sub>起而有事

通玄抄云、○云。

嘉祥宝窟中末云、有人言、此無明是生死本因故、云<sub>二</sub>無始<sub>一</sub>。是以撰論無始者、即是顯<sub>レ</sub>因也。若有<sub>レ</sub>始則無<sub>レ</sub>因、以<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>始則有<sub>レ</sub>初。初則無<sub>レ</sub>因、以<sub>レ</sub>其無始<sub>一</sub>則是有<sub>レ</sub>因。所以明<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>因者、顯<sub>二</sub>仏法是因縁義<sub>一</sub>。有人言、無始無明者、始背<sub>レ</sub>明入<sub>レ</sub>暗時、煩惱微細、唯固因是一無明。無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>四心次第起<sub>一</sub>。故云<sub>二</sub>心不相応<sub>一</sub>。此師云、所以明<sub>二</sub>相応不相応<sub>一</sub>者、為<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>簡<sub>二</sub>惑<sub>一</sub>。惑<sub>レ</sub>麤者有<sub>二</sub>四心<sub>一</sub>故、無<sub>二</sub>相応<sub>一</sub>也。無始者有<sub>二</sub>二<sub>一</sub>。一々無明無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>始故、衆生無<sub>レ</sub>頭、波若無<sub>レ</sub>底。一々無明最在<sub>レ</sub>初実録有<sub>レ</sub>始。但無<sub>レ</sub>有<sub>一</sub>法在<sub>二</sub>此前<sub>一</sub>者故、云<sub>二</sub>無始<sub>一</sub>也。文。

又云、以<sub>二</sub>此四住地一起<sub>一</sub>一切煩惱。故為<sub>二</sub>始起四住地<sub>一</sub>。其住地前便無<sub>レ</sub>法起。故云<sub>レ</sub>名<sub>二</sub>無始無明住地<sub>一</sub>。文。

私云、已上釈意、或無始者無法、始者始起義也。無明無法始起云無始一也。又義、無始無二始初一之義也。又義、無明前無法故云無始一也。今釈論意依不如用、而無明体起故、体用因果同時。故無明体、以用為起因起用。又、依体起事。無始故不遮因緣義。又、無生死始一也。  
二卷論云、謂從無始來、謂不如實知真如法一故文。  
問、無明既在体用、何云無法耶。又云、忽然念起名為無明。豈仮因緣耶。答、雖論体用因果、妄想因緣、和合体用也。無明生起因緣、其体相本自不有。故忽然念起因緣也。  
宝窟云、金光明云、無明体性本自不有。妄想因緣和合而有。無所有一故、仮名無明。是故我說、名曰無明。無明既爾。四住亦爾。豈可言有五住可斷。但今、約文謂衆生。故強名五住。知此五住本來無生一故、名為斷耳。大品云、若法先有後無、諸仏菩薩則有過罪。此經云、非壞法滅。本性清淨故名滅。須留意此門一文。  
此釈、実有味。留思可觀之。慈行意体有理無故在無明体一歟。

【校勘】

- (1) 因…東二因、長なし。  
 (2) 不如故…○云云…長なし。  
 (3) 嘉祥…海引嘉祥、長なし。  
 (4) 中…東真下。  
 (5) 末云…真末、  
 (6) 有人言…明住地…海なし。  
 (7) 言…底慈長云、種東により改む。  
 (8) 此…長なし。  
 (9) 明…長明者。  
 (10) 是以…長故。  
 (11) 即…種易。  
 (12) 無…底慈長真なし、種東田により補う。

- (13) 以…長因。
- (14) 始…長始也。
- (15) 則…長因。
- (16) 因…慈始、(慈注)因。
- (17) 以其…長也今云。
- (18) 有因所…有因者…長なし。
- (19) 明…種なし。
- (20) 義…長義也。
- (21) 言…底慈長真云、(種東)により改む。
- (22) 始…底慈長真明、(種東)により改む。
- (23) 明…底慈長真始、(種東)により改む。
- (24) 始…種長なし。
- (25) 微…慈真故、(慈注)微。
- (26) 唯…底(種東)慈長真維、(口)從、『勝鬘寶窟』卷中之末(大正三七・五二頁上)により改む。
- (27) 固因是一無明…種因是一無明、(慈)固因是一無明也、(長)闇、真同因是一無明。
- (28) 起…底慈真化、(種東)(慈注)長により改む。
- (29) 云…(種東)慈真言。
- (30) 師云…(種東)師之、(長)師意云。
- (31) 簡…長揀。
- (32) 麤…種なし。
- (33) 細…長細耳。
- (34) 惑…(種東)或。
- (35) 麤…種なし、(長)麤則。
- (36) 者…長則。
- (37) 有…種なし。
- (38) 心…長心次第。
- (39) 故…(口)故相応惑細者無四心。
- (40) 無…真なし、(長)有相応不。
- (41) 也…(口)也云云。
- (42) 釈…底(種東)慈海長尺、(真)により改む。以下示さず。
- (43) 一…長なし。
- (44) 頭…(種)頭。
- (45) 波若…(種)波羅、(慈)長真彼若。
- (46) 無底一…又云以…(長)無始者一無明無在初無有一法而在此前故云無始也二云。

- (47) 録…東際。  
(48) 但…種真但。  
(49) 法…慈注法文、法而イ、真法而。  
(50) 前…種萌。  
(51) 云…種東言。  
(52) 以…真なし。  
(53) 其…口其四。  
(54) 便…底東慈長真使、種により改む。  
(55) 名…長なし。  
(56) 始…東明、東注始。  
(57) 地…種東なし。  
(58) 私…海注瑜公。  
(59) 或無始…長無。  
(60) 者…口者無者。  
(61) 法…長法也。  
(62) 始…東なし。  
(63) 法…長法而。  
(64) 始…長始者。  
(65) 故…種取。

- (66) 今…長今云。  
(67) 論…長論之。  
(68) 而…長なし。  
(69) 無明体起…長起無明体。  
(70) 同…底東慈海真因、種により改む。  
(71) 無明…長なし。  
(72) 以…長依。  
(73) 為…長なし。  
(74) 因…底種東慈海長真なし、口により補う。  
(75) 又…長なし。  
(76) 起…長起起。  
(77) 因…種なし。  
(78) 又…長而。  
(79) 始…長初、口始無明無始。  
(80) 也…種なし。  
(81) 二卷…長口故。  
(82) 謂…長なし。  
(83) 謂…長なし。  
(84) 不…長不知。

- (85) 如実知真…真なし。  
 (86) 故…底種切、底注故。  
 (87) 文…海文云々。  
 (88) 問無明く明体歟…海なし。  
 (89) 既…長已。  
 (90) 在…長有。  
 (91) 云無法…長無法云。  
 (92) 又云忽く因縁耶…長なし。  
 (93) 然…底種念、東慈真により改む。  
 (94) 名為…真なし。  
 (95) 豈…種是、東豈是。  
 (96) 因…底慈真なし、種東口により補う。  
 (97) 相…長用。  
 (98) 自不…長不、真自。  
 (99) 然…底種東念、慈長真により改む。  
 (100) 起…長起是其。  
 (101) 本…慈平。  
 (102) 合…底種東慈長真なし、口により補う。  
 (103) 説…慈歹十兌。

- (104) 曰…慈云、長為。  
 (105) 四…種曰。  
 (106) 豈…種是。  
 (107) 可…長なし。  
 (108) 言…底云、種東慈長真により改む。  
 (109) 五住可断…長可断五住。  
 (110) 但…底種真但、東慈長により改む。  
 (111) 今…長今言断者为。  
 (112) 約文謂…慈約受謂、長なし、口約定謂。  
 (113) 強…種なし。  
 (114) 知…慈長智。  
 (115) 本…慈平。  
 (116) 来…種来来。  
 (117) 耳…長真耳<sub>文</sub>、慈耳<sub>文イ</sub>。  
 (118) 壊…慈口、慈注壊イ。  
 (119) 滅…長滅云。  
 (120) 須…底種源、東慈長真深、口によりむ。  
 (121) 意此門也…長此門意。  
 (122) 思…長意。

(123) 之…長察。

(124) 在…種東有、慈長存。

(125) 体…長体地可檢。

(126) 歟…種東故、長歟可檢之、真なし。

【訓読】

不如に因るが故に起を得て而も有なりの事

『通玄抄』に云く、○と云云。

嘉祥の『宝窟』中末に云く、有る人の言に、此の無明は是れ生死の本因なるが故に、無始と云ふ。是れを

以て『撰論』の無始とは、即ち是れ因を顯すなり。若し始有らば則ち因無し、始有るを以て則ち初有り。

初に則ち因無く、其の無始を以て則ち是れ因有り。所以に因有るを明かすは、仏法は是れ因縁の義を顯す。

有る人の言に、無始無明とは、始めて明に背ひて暗に入る時、煩惱微細、唯だ固より因は是れ一無明なり。

四心次第に起こること有ること無し。故に心不相応と云ふ。此の師云く、所以に相応不相応を明かすは、

惑の麤細を簡ばんと欲するが為なり。惑の麤なるは四心有るが故に、相応無きなり。無始とは二積有り。

一々の無明に始有ること無きが故に、衆生に頭無く、波若に底無し。一々の無明の最も初に在れば実録

には始有り。但し一法として此の前に在る者有ること無きが故に、無始と云ふなりと文。

又た云く、此の四住地を以て一切の煩惱を起こす。故に始起の四住地と為す。其の住地の前は便ち法無

くして起こす。故に無始無明住地と名づくこと云ふと文。

私に云く、已上の釈意は、或ひは無始とは無法、始とは始起の義なり。無明は無法にして始起するを

無始と云ふなりと言はむとぞ。又たの義は、無始とは始初無きの義なり。又たの義は、無明の前に無法な

るが故に無始と云ふなり。今の『釈論』の意は不如の用に依りて、而も無明の体を起こすが故に、体用

の因果同時なり。故に無明の体は、用を以て因と為して用を起こす。又た、体に依りて事を起こす。無始なるが故に因縁の義を遮せず。又た、生死の始無きなり。

二卷の『論』に云く、謂く從無始來、謂く実の如く真如の法が一なることを知らざるが故にと文り。

問ふ、無明既に体用に在るに、何ぞ無法と云ふや。又た云く、忽然念起を名づけて無明と為す。豈に因縁に仮するや。答ふ、体用の因果を論ずると雖も、妄想の因縁は、和合の体用なり。無明生起の因縁は、其の体相本より自ずから有らず。故に忽然念起は因縁なりと言はむとぞ。

『宝窟』に云く、『金光明』に云く、無明の体性は本より自ずから有らず。妄想的因縁は和合して有なり。所有無きが故に、仮に無明と名づく。是の故に我説きて、名づけて無明と曰ふ。無明既に爾り。四住も亦た爾り。豈に五住に断すべきこと有りと云ふべけんや。但だし今、文に約して衆生と謂ふ。故に強ひて五住と名づく。此の五住は本来無生と知るが故に、名づけて断と為すのみ。『大品』に云く、若し法先に有りて後に無くんば、諸仏菩薩則ち過罪有らん。此の『経』に云く、壞法の滅に非ず。本性清浄なるが故に名づけて滅と為す。須らく意を此の門に留むべきなりと文り。

此の釈、実に味わい有り。思ひ留めてこれを観ずべし。慈行の意は体有りて理無きが故に無明の体に在るか。

### 【注釈】

- (1) 不如…伐提摩多訳『釈摩訶衍論』巻四によれば、「言不如者、当有<sup>二</sup>何義<sup>一</sup>。謂違逆義故、云何三法。一者、実知一法。二者、真如一法。三者、一心一法。是名為三」(大正三二・六二五頁中)とある。
- (2) 不如に因るが故に起を得て而も有なり…伐提摩多訳『釈摩訶衍論』巻四(大正三二・六二五頁中)



にある一文。

(3) 『通玄抄』…志福撰『釈摩訶衍論通玄鈔』（出統七三）を指すと考えられるが、巻頁数等不詳。

(4) 嘉祥…嘉祥大師吉藏（五四九～六二三）のこと。中国六朝時代末から唐初期にかけての三論学僧。

一説によれば、七歳のころ法朗について出家し、二一歳で具足戒を受ける。隨が興ると、会稽の嘉祥寺に止まり、『中論疏』『百論疏』『十二門論疏』など多くの疏を著した。開皇（五八一～六〇〇）

の末頃には、煬帝（在位…六〇四～六一八）の命により揚州の慧日道場に住し、のちに日嚴寺に移る。武徳（六一八～六二六）の初め頃、十大徳の一人に選ばれると實際寺・定水寺・道宗寺に住し、のちに齊王元吉の崇仰を受けて延光寺に移る。門下には、慧朗・慧灌・智凱などの俊才が多く、撰山棲霞寺の僧朗にはじまる撰山三論学を繼承して大成させた三論宗中興の祖として仰がれている。

(5) 『宝窟』…吉藏撰『勝鬘宝窟』巻中之末（大正三七・五二頁上）。ここでは、本文と文字の異同が多

いため引用箇所を全文を記す。なお、相違する文字には便宜上、傍線を付す。「有人言、此無明是生死本因故、云無始<sub>レ</sub>是始<sub>レ</sub>。是以撰論云無始者、即是顯<sub>レ</sub>因也。若有<sub>レ</sub>始則無<sub>レ</sub>因、以<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>始則有<sub>レ</sub>初、初則無<sub>レ</sub>因。以<sub>レ</sub>其無始<sub>レ</sub>則是有<sub>レ</sub>因。所以明<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>因者、顯<sub>レ</sub>弘法是因緣義。有人言、無始無明者、始背<sub>レ</sub>明入<sub>レ</sub>暗時。煩惱微細、唯同<sub>レ</sub>是一無明。無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>四心次第起<sub>レ</sub>。故言<sub>レ</sub>心不相<sub>レ</sub>應。此師云、所以明<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>應不相<sub>レ</sub>應者、為<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>簡<sub>レ</sub>惑<sub>レ</sub>麤<sub>レ</sub>細<sub>レ</sub>。惑<sub>レ</sub>麤<sub>レ</sub>者有<sub>レ</sub>四心<sub>レ</sub>。故相<sub>レ</sub>應。惑<sub>レ</sub>細<sub>レ</sub>者無<sub>レ</sub>四心<sub>レ</sub>。故不相<sub>レ</sub>應也。無始者有<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>釈<sub>レ</sub>。一云、無明無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>始。故衆生無<sub>レ</sub>頭、波若無<sub>レ</sub>底。二云、無明最在<sub>レ</sub>初實錄有<sub>レ</sub>始。但無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>一法在<sub>レ</sub>此前<sub>レ</sub>者<sub>上</sub>。故言<sub>レ</sub>無始<sub>レ</sub>也。」（傍線筆者）

(6) 『撰論』…典拠不詳。

(7) 四心…四住煩惱のこと。

- (8) 此の師…不詳。
- (9) 又た云く…吉藏撰『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五〇頁下）
- (10) 住地…本条目には「住地前便無<sub>レ</sub>法起。故云<sub>レ</sub>名<sub>二</sub>無始無明住地<sub>一</sub>」とあるが、『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五〇頁下）には「四住前便<sub>レ</sub>無法起故。故為<sub>二</sub>無始無明住地<sub>一</sub>」とある。
- (11) 二卷の『論』…実又難陀訳『大乘起信論』。本書巻上に、「不覺義者、謂住無始来不如実知真法一故。」（大正三二・五八五頁中）とある。
- (12) 忽然念起…真如平等の理に達しないために忽然として差別の念が起動すること。
- (13) 『宝窟』…吉藏撰『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五一頁下）
- (14) 『金光明』…『金光明經』卷一（大正一六・三四〇頁中）。「名曰<sub>二</sub>無明<sub>一</sub>」まで引用している。
- (15) 体性…本条目には「体性」とあるが、『金光明經』卷一（大正一六・三四〇頁中）には「体相」とある。
- (16) 文…本条目には「文」とあるが、『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五一頁下）には「空」とある。
- (17) 『大品』…鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜多經』卷四（大正八・四〇五頁中）より取意の文。
- (18) 『經』…不詳。
- (19) 慈行…慈行大師志福（一〇九八）のこと。遼の道宗（在位…一〇五五～一一〇二）の命により、『釈摩訶衍論通玄鈔』を著す。本書は、同時代の法悟の『釈摩訶衍論贊玄疏』と双璧をなし、華嚴と密教との合一を説くという。その他、生没年を含めた詳細については不明。

# 【解説】

本条目は、『釈摩訶衍論』巻四の「因<sub>二</sub>不如<sub>一</sub>故得<sub>レ</sub>起而有」（大正三二・六二五頁中）について解説した

条目である。

ここで『勝鬘宝窟』を用いて、無始無明について述べている。そこで、無始と説く所以について、①無明無法にして始起するため、②始初がないため、③無明の前に無法であることを挙げる。次いで、本条目の条目名について、不如の用に依て無明の体を起こすので、体用の因果は同時に起こることを述べている。すなわち、無明の体は用を以て用を起こし、また体に依て事を起こす。つまり、無始によつて因縁の義を遮らず、生死の始はないことを示している。

そこで問者は、無明は既に体用があるのにどうして無法なのか。また、忽然念起（忽然として差別の念が起動すること）を無明というのにどうして因縁を仮すのかと問う。これに対して答者は、体用の因果を論じると雖も、妄想の因縁は和合の体用にして、無明生起の因縁はその体相が自ずから有るのではないという。したがって、忽然念起を因縁とする。

そして最後に、『勝鬘宝窟』を用いて、五住は本来無生であるために断とするが、これは壞法の滅ではなく、本性清浄であるための滅であると説く。これは思い留めて観じなければいけないという。

なお、本条目の「因不如故得起而有」については、『開解鈔』卷一六（日藏四五・七六頁上〜七七頁下）でも述べられているので参照されたい。

（中村賢識）

# 五一、於有愛數四住地事

## 【本文】

於<sup>(1)</sup>有愛數<sup>(2)</sup>四住地事

抄云、有通<sup>(3)</sup>三有、愛通<sup>(4)</sup>一切分別俱生<sup>(5)</sup>文。

疏云、有謂<sup>(6)</sup>三有、愛謂<sup>(7)</sup>三有、愛謂俱生<sup>(8)</sup>文。

大乘義疏云、於有愛數四住地者、有愛謂無色惑<sup>(9)</sup>。又、數色變數。取<sup>(10)</sup>下色愛・欲愛及見一処<sup>(11)</sup>、定為<sup>(12)</sup>四住<sup>(13)</sup>文。

宝窟云、於有愛數四住地者、有愛是其第四住地。前三是有愛品數。舉<sup>(14)</sup>後括<sup>(15)</sup>前故、名<sup>(16)</sup>有愛數四住地<sup>(17)</sup>也<sup>(18)</sup>文。

## 【校勘】

(1) 於…慈二於、長なし、真四十九於。

(2) 有愛數…長なし。

(3) 謂…長云。

(4) 謂…長云。

(5) 大乘義く四住文…長なし。

(6) 疏…種なし。

(7) 惑…底種東慈海真或、口により改む。

(8) 色…慈注也イ。

(9) 變…底種東慈海反、真により改む。

(10) 愛…種東なし、慈真愛數。

(11) 故…底種東慈海真なし、長により補う。

(12) 名…東各、東注名。

(13) 文…種東なし。

【訓読】

有愛と数<sup>①</sup>に於いて四住地<sup>②</sup>なりの事

『抄』<sup>③</sup>に云く、有は三有<sup>④</sup>に通じ、愛は一切分別俱生に通ずと<sup>文リ</sup>。

『疏』<sup>⑤</sup>に云く、有は謂く三有、愛は謂く三有、愛は謂く俱生なりと<sup>文リ</sup>。

『大乘義疏』に云く、於有愛数四住地とは、有愛は謂く無色の惑なり。又た、数は色の変数なり。下の色愛・欲愛と及び見一処を取り、定むで四住<sup>⑦</sup>と為すと<sup>文リ</sup>。

『宝窟』<sup>⑧</sup>に云く、於有愛数四住地とは、有愛は是れ其の第四住地なり。前の三は是れ有愛の品数なり。後を挙げて前を括る故に、有愛数四住地と名づくるなりと<sup>文リ</sup>。

【注釈】

（１）有愛…色界・無色界における諸々の渴愛のこと。

（２）数…四住地の煩惱の前三つを指す。

（３）『抄』…志福撰『釈摩訶衍論通玄鈔』卷三（正統四六・一三九頁中）

（４）三有…三界におけるそれぞれの存在のしかた。すなわち、欲有・色有・無色有の三つを指す。

（５）『疏』…法悟撰『釈摩訶衍論贊玄疏』卷三（正統四五・八八四頁中）

（６）『大乘義疏』…伝聖徳太子撰『勝鬘經義疏』卷中之末（大正五六・一一頁上）

（７）四住…本条目には「定為<sup>二</sup>四住<sup>一</sup>」とあるが、伝聖徳太子撰『勝鬘經義疏』卷中末（大正五六・一一頁上）には「足為<sup>二</sup>四住地<sup>一</sup>」とある。

（８）『宝窟』…吉蔵撰『勝鬘宝窟』卷中之末（大正三七・五二頁中）

(9) 四住地…本条目にはないが、吉藏撰『勝鬘宝窟』卷中之末(大正三七・五二頁中)には、「四住地の後に「牒<sup>二</sup>挙前劣<sup>一</sup>」という句が入る。

### 【解説】

本条目は、『勝鬘經』の「於<sup>二</sup>有愛数<sup>一</sup>四住地」(大正一二・二二〇頁上)について解説した条目である。しかし、この一文は『釈摩訶衍論』卷四(大正三二・六二五頁中)で用いられていることより、本条目も先より続く『釈摩訶衍論』の解説の一部といえよう。

しかし本条目は、同箇所を注釈した『通玄鈔』『贊玄疏』『勝鬘經義疏』『勝鬘宝窟』の文を列挙しているのみである。そこで、『開解鈔』卷一五をみると、「私云、鈔約<sup>二</sup>理実義<sup>一</sup>云<sup>二</sup>通見修<sup>一</sup>。疏依<sup>二</sup>增勝<sup>一</sup>云<sup>二</sup>唯修惑<sup>一</sup>也」(日藏四五・七一頁上)と、『通玄鈔』と『贊玄疏』の解釈の違いについて述べている。

(中村賢識)

## 五二、勝鬘經云世尊四住地力一切上煩惱依種事

### 【本文】

勝鬘經云、世尊、四住地力、一切上煩惱依種事

宝窟云、此四住力者、總以標<sup>(5)</sup>。四住能生、現起故為<sup>(4)</sup>力。一切上煩惱依種者、顯<sup>(1)</sup>其力相<sup>(6)</sup>。此<sup>(7)</sup>生、顯<sup>(1)</sup>前能生是力義<sup>(8)</sup>。四住所起煩惱、龜強名<sup>(8)</sup>上。故云<sup>(8)</sup>一切上煩惱<sup>(9)</sup>。四住与上煩惱、作<sup>(9)</sup>依作<sup>(10)</sup>種。已起煩惱、依<sup>(11)</sup>之得<sup>(12)</sup>立<sup>(13)</sup>。故名<sup>(13)</sup>依也。未起煩惱、四住能生。因<sup>(13)</sup>之為<sup>(13)</sup>種。以<sup>(13)</sup>作<sup>(13)</sup>依作<sup>(13)</sup>種故、稱為<sup>(13)</sup>力。此無明住

地下、対<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>顕<sup>レ</sup>劣<sup>レ</sup>也<sup>文</sup>。

大乘義疏<sup>16</sup>云、依種者、別相煩惱依<sup>二</sup>通相<sup>一</sup>而有。謂<sup>レ</sup>之依。通相煩惱生<sup>二</sup>別相<sup>一</sup>。称<sup>レ</sup>之為<sup>レ</sup>種。依取<sup>二</sup>五住地家起煩惱<sup>一</sup>、種取<sup>二</sup>四住地根本取相<sup>一</sup><sup>文</sup>。

【校勘】

- |  |  |
|--|--|
| (1) 勝 <sup>二</sup> 眞五十勝 <sup>一</sup> 。 | (10) 已 <sup>二</sup> 海能 <sup>一</sup> 。  |
| (2) 鬘 <sup>二</sup> 底種東海長万、眞により改む。      | (11) 立 <sup>二</sup> 底慈海眞三、種東慈注長により改む。  |
| (3) 云世尊 <sup>二</sup> 長なし。              | (12) 作 <sup>二</sup> 種なし。               |
| (4) 地 <sup>二</sup> 長なし。                | (13) 称 <sup>二</sup> 底種評、長行、東慈海眞により改む。  |
| (5) 総 <sup>二</sup> 底種慈海長惣、東眞により改む。     | (14) 力 <sup>二</sup> 海力 <sup>云云</sup> 。 |
| (6) 相 <sup>二</sup> 長用。                 | (15) 此無明く本取相 <sup>二</sup> 海なし。         |
| (7) 挙 <sup>二</sup> 種東慈注眞業、慈果、長其。       | (16) 疏 <sup>二</sup> 長章。                |
| (8) 住 <sup>二</sup> 慈長種。                | (17) 取 <sup>二</sup> 海眞而。               |
| (9) 上 <sup>二</sup> 眞なし。                |  |

【訓読】

『勝鬘經』に云く、世尊、四住地の力は、一切の上煩惱の依種たる事

『宝窟』<sup>17</sup>に云く、此四住力とは、総じて以て標挙す。四住能生、現起するが故に力と為す。一切上煩惱依種とは、其の力相を顕す。此れ所生を挙げて、前の能生は是れ力の義を顕す。四住所起の煩惱は、僿強

なるを上と名づく。故に一切上煩惱と云ふ。四住と上煩惱と、依と作り種と作る。已起の煩惱は、これに依りて立つことを得たり。故に依と名づくるなり。未起の煩惱は、四住能く生ず。これに因りて種と為す。依と作り種と作るを以ての故に、称して力と為す。此無明住地より下は、勝に對して劣を顯すなりと<sup>文</sup>り。『大乘義疏』に云く、依種とは、別相の煩惱は通相に依りて有り。これを謂ひて依たり。通相の煩惱は別相を生ず。これを称して種と為す。依は五住地家の起煩惱を取り、種は四住地の根本の取相を取ると<sup>文</sup>り。

### 【注釈】

(1) 『宝窟』…吉藏撰『勝鬘宝窟』卷中之末(大正三七・五二頁中)

(2) 『大乘義疏』…伝聖徳太子撰『勝鬘經義疏』卷中之末(大正五六・一一頁上)

### 【解説】

本条目は、『勝鬘經』の「世尊、此四住地力、一切上煩惱依種」(大正一二・二二〇頁上)について解説した条目である。ここでは、『勝鬘宝窟』と『勝鬘經義疏』の文を列挙して解説に代えている。

まず『勝鬘宝窟』は、「四住力」と「一切上煩惱依種」について述べている。すなわち、「四住力」は四住能生が現起するために力の義を顯し、「一切上煩惱依種」はその力相を顯しているという。また、「一切上煩惱」は麁強である四住所起の煩惱のことをいう。そこで、已起の煩惱は一切上煩惱に依て立つので「依」という。また、未起の煩惱が四住をよく生じることので「種」と為すと述べている。

次に『勝鬘經義疏』は、通相によつて別相の煩惱が有ることを「依」、通相の煩惱が別相を生ずることを「種」と述べている。また、「依」は五住地家の煩惱を取り、「種」は四住地の根本の取相を取ること



いう。

（中村賢識）

### 五三、仏菩提智断事

#### 【本文】

仏菩提智断事<sup>(1)(2)(3)(4)</sup>

窟云、問。仏は無学之人。菩提は無学之智。云何以「無学人」秉「無学智」、更断「煩惱」耶。答。仏智断与不斷、自古至今凡有「兩釈」。一云、金剛心為「無碍断」。仏果起証、則金剛心断仏果不断。故大品云、菩薩在「無碍道中」行、仏在「解脫道中」行也。二云、金剛心無碍伏仏果起、則断用此文也。今取明者檢疏經論以「金剛心断」。而此文云「仏果断」者、諸仏果解脫道起証故名断耳。又無明常相続、金剛心、断其前念。仏果起続「惑無」處、而遮「後念種類」不生。故名為断文。<sup>(20)(21)(22)(23)(24)(25)(26)(27)(28)</sup>  
大乘義疏云、明仏菩提智能断者、就断明「勝菩提智」。謂空解脫也。此明、借断明力。一云、金剛心断惑已尽名為「学仏」。故云「如来菩提以断」文。<sup>(29)(30)(31)(32)(33)(34)(35)</sup>

#### 【校勘】

(1) 仏…東海○仏、慈三仏、真五十一仏。

(2) 菩…長果。

(3) 提…慈薩、長なし。

(4) 智…長なし。

(5) 窟…底種東慈海嶺、長宝窟、真により改む。

(6) 仏…種なし。

- (7) 之…慈長真なし。  
 (8) 与…種東共。  
 (9) 自古…海なし。  
 (10) 至…底種東真爰、慈愛、海なし、長及、  
 により改む。  
 (11) 今…海なし。  
 (12) 釈…底種東慈長尺、海真により改む。  
 (13) 則…真なし。  
 (14) 心…種なし。  
 (15) 断…長断而。  
 (16) 断…長断也。  
 (17) 用此文…長なし。  
 (18) 取…慈真所、長なし。  
 (19) 者…海共、長凡。  
 (20) 疏…底疏、真衆、慈により改む。  
 (21) 耳…真乎。  
 (22) 又無明く以断文…海云々。

- (23) 続…長令。  
 (24) 或…底惑、種東武、長なし、慈により改む。  
 (25) 無…長なし。  
 (26) 処…種所、長なし。  
 (27) 而遮…長なし。  
 (28) 名為…種各。  
 (29) 大乘義く以断文…長なし。  
 (30) 提…慈注薩。  
 (31) 断…種慈なし。  
 (32) 提…慈薩。  
 (33) 明借断…真なし。  
 (34) 明…慈明断明、真なし。  
 (35) 力…真なし。  
 (36) 惑…種東武、慈或。  
 (37) 尽…東慈注空。  
 (38) 提…慈薩。

【訓読】

仏菩提智断の事<sup>①</sup>

『窟<sup>②</sup>』に云く、問ふ。仏は是れ無学<sup>③</sup>の人なり。菩提は是れ無学の智なり。云何んが無学の人を以て無学の智を秉りて、更に煩惱を断ぜんや。答ふ。仏智の断と不断と、古自り今に至り凡そ両积有り。一に云く、金剛心<sup>④</sup>を無碍断と為す。仏果証を起せば、則ち金剛心を断じ仏果断ぜず。故に『大品<sup>⑤</sup>』に云く、菩薩は無碍道の中に在りて行じ、仏は解脱道の中に在りて行ずるなりと。二に云く、金剛心の無碍に仏果の起を伏すれば則ち断を此の文に用ふなり。今明かすことを取るは疏経論を検ぶるに金剛心を以て断ず。而して此の文に仏果を断ずと云ふとは、諸の仏果は解脱道に証を起するが故に断と名づくのみ。又た無明常に相續して、金剛心、その前念を断ず。仏果起りて続惑<sup>⑥</sup>の処無くして、後念の種類を遮して生ぜず。故に名づけて断と為すと<sup>文リ</sup>。

『大乗義疏<sup>⑦</sup>』に云く、「明仏菩提智能断」とは、断に就いて勝菩提の智を明す。謂く空解脱なり。此の明とは、断ずることを借りて力を明かす。一に云く、金剛心の惑を断ずること已に尽きるを名づけて学仏と為す。故に如来菩提以て断ずと云ふと<sup>文リ</sup>。

【注釈】

- (1) 仏菩提智断…求那跋陀羅訳『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』（以下、『勝鬘経』）卷一（大正一二・二二〇頁上）。『大正』における原文では「仏菩提智所断」と「所」が挿入されている。
- (2) 『窟』…吉蔵撰『勝鬘宝窟』中之末（大正三七・五三頁上）
- (3) 無学…阿羅漢向から阿羅漢果に至った修行者で他に学ぶべきものがなくなった境地。

(4) 金剛心…心の不動なことを、金剛の堅固で何にも破壊せられないことに喩えたもの。

(5) 『大品』…鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜經』卷二六（大正八・四一一頁中）

(6) 続惑…惑が続くこと。本文では、仏果が起けると惑が続くことなく、後念の種類を遮して生ぜしめない、としている。『大正』における引用原文では、該当部分が「鎮惑」となっている。「鎮惑」を用いて意を取ると、仏果を起こして惑を鎮めれば、処無くして、後念の種類を遮して生ぜしめない、となる。

(7) 『大乘義疏』…伝聖徳太子『勝鬘經義疏』卷一（大正五六・一一頁中）

(8) 空解脱…禪定の三つの目標とされる三三昧、または三解脱門の一つである空解脱門のこと。三解脱門とは、①空解脱門②無相解脱門③無願解脱門の三つをいい、①においてあらゆる存在が空であることを観じ、②において空ゆえに無差別と観じ、③は無差別平等ゆえに無相となり、最終的には願う所もなくなるという。ここで特に①についてみれば、あらゆる事象には本質的に実態性はなく、縁起によって成立しているという空觀に通達することによって解脱に到る門とされる。

### 【解説】

本条目では、『勝鬘經』における「仏菩提智所断」（原文では「仏菩提智所断」を説明するために、『勝鬘宝窟』卷中之末と『勝鬘經義疏』卷一の該当部分を引用している。なお、頼瑜自身による見解についてはここでは示されていない。

まず『勝鬘宝窟』卷中之末の引用部分では、仏は無学の人であり、菩提とは無学の智である。どうして無学の人が無学の智を取ることによって、更に煩惱を脱することができようか、と問いを起こしている。

これに答えて、仏智における断と不断には二つの釈があるとしている。一つは、金剛心を無碍断とするもので、仏果が証されれば、すなわち金剛心が断たれ、仏果は断ずることはない、というものである。これを理由に『摩訶般若波羅蜜經』卷二六では、菩薩は無碍道の中に在って行じ、仏は解脱道の中にあつて行ずるという。二つには、金剛心の無碍に仏果の起することを伏するのは、則ち断である、とこの文を用いるのである。これらについて、疏經論を点検すると金剛心を以て断ずとされている。ここであつたところの仏果を断ずというのは、仏果は解脱道において証を起すために断と名づけるのだという。また無明の前念を金剛心は断ずるので、仏果が起ると惑が続くことなく、その後念を生じさせないというために、断と名付けるのである。

次に『勝鬘經義疏』卷一の引用部分について、「明仏菩提智能断」とは、「断」について勝菩提智、すなわち空解脱として明らかにしている。「明」とは「断ずること」で明らかにすることが出来る。金剛心とは、すでに惑を断ずることが尽きているので、学仏と名付けているのだとしている。そして、それが故に如来の菩提が断ずるといふのだ、としている。

（寺山賢照）

